0053082000

0053082-000

379.1-I393i

印南郡三治協会史

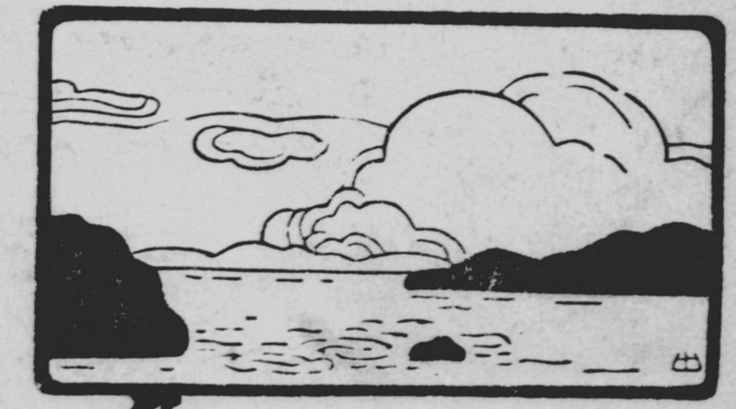
印南郡三治協会

1929

AHP

創立二十週年記念

印南郡三治協會史



3
I

印南郡三治協會史

379.1 I 393c

觀國光

第一號

内閣總理大臣田中義一閣下題字

帝国図書館蔵書之印

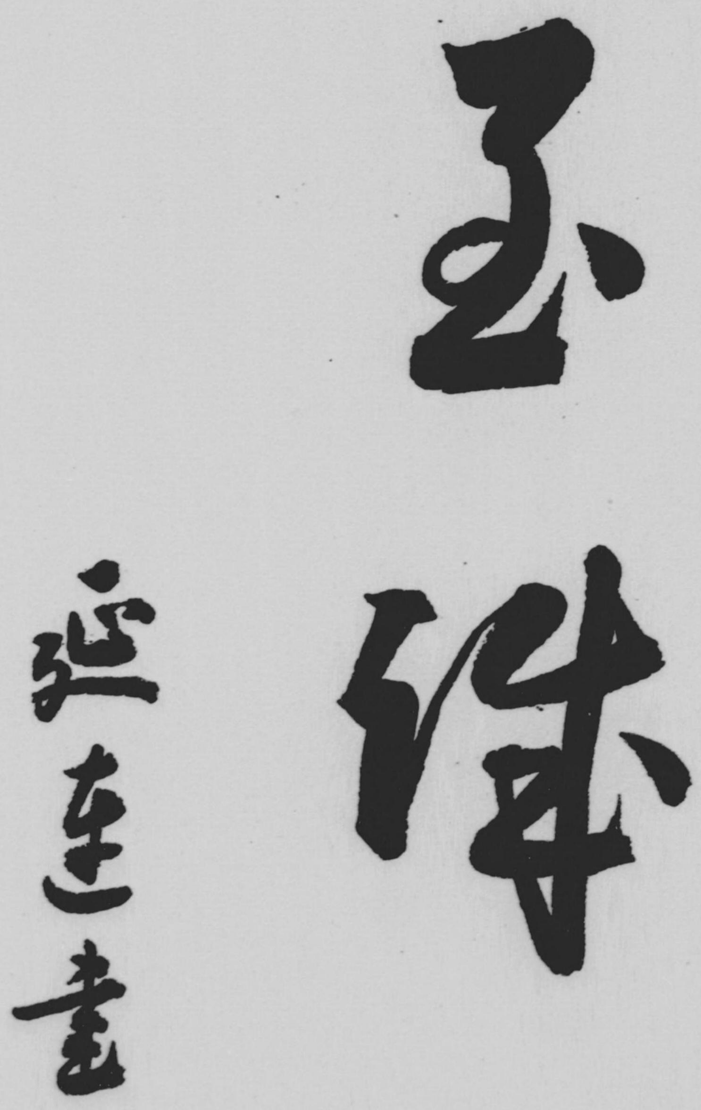
国立国会図書館
29.7.22

337167

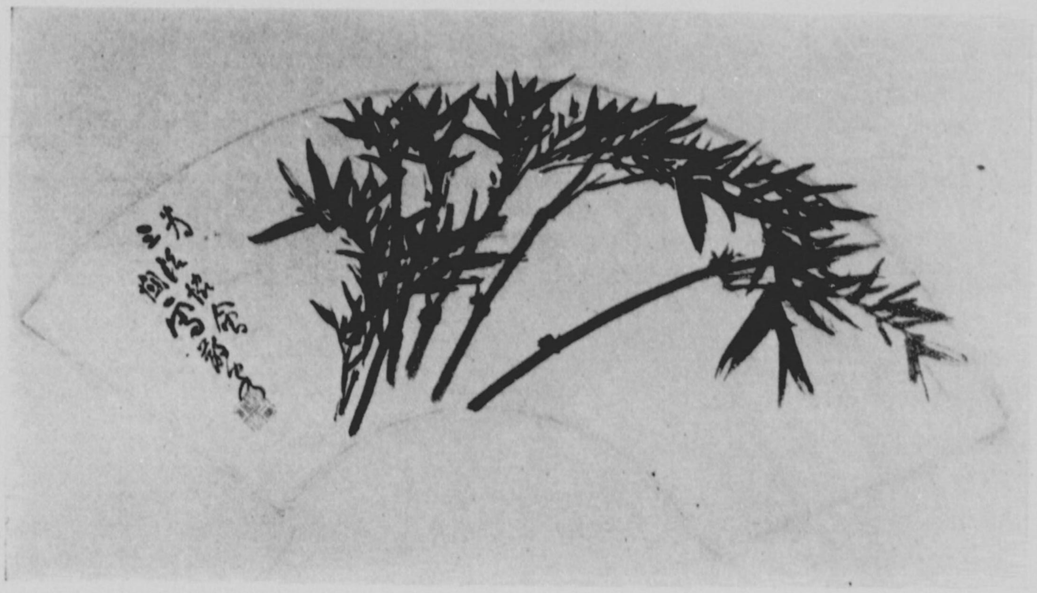
內務大臣望月圭介閣下題字

故　貴族院議員服部一三閣下題字

（明治四十三年揮毫）



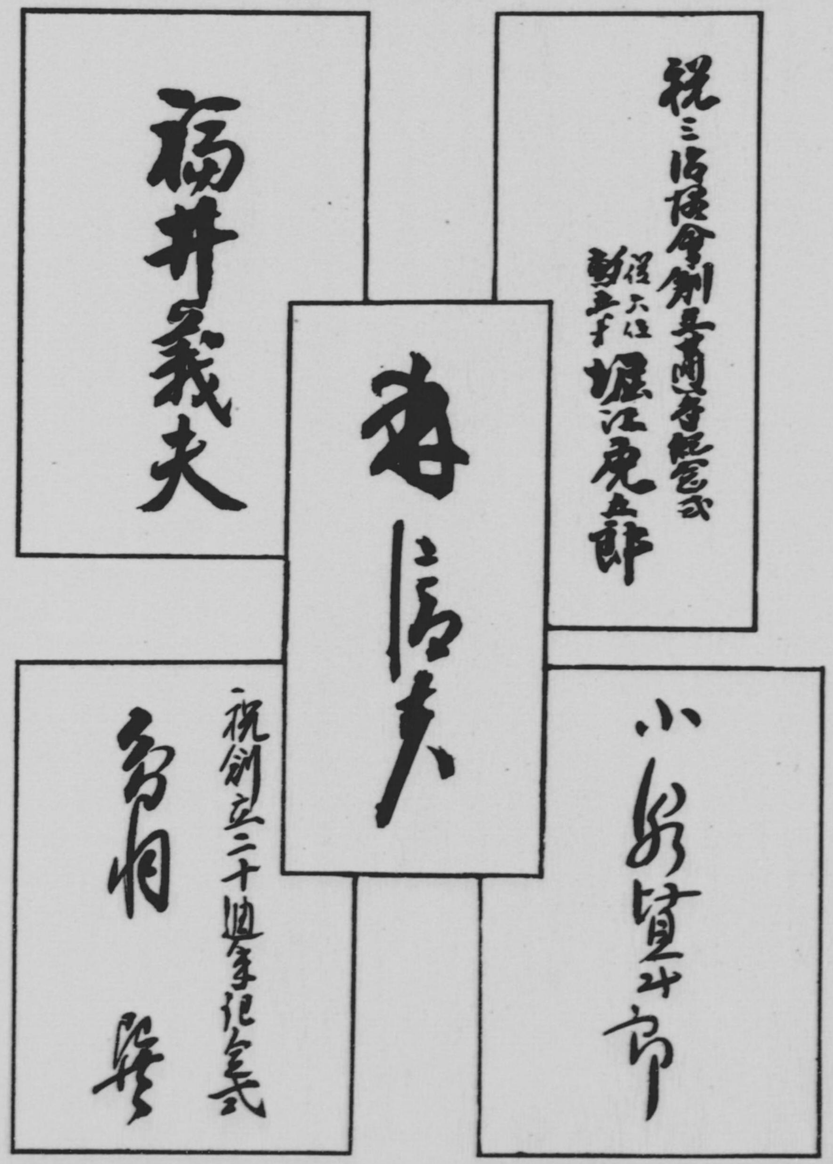
兵庫縣知事長延連閣下題字



橋本關雪氏寄贈畫

多木久米次郎氏題字

祝三治協會創立二十週年記念式



長郡代歴

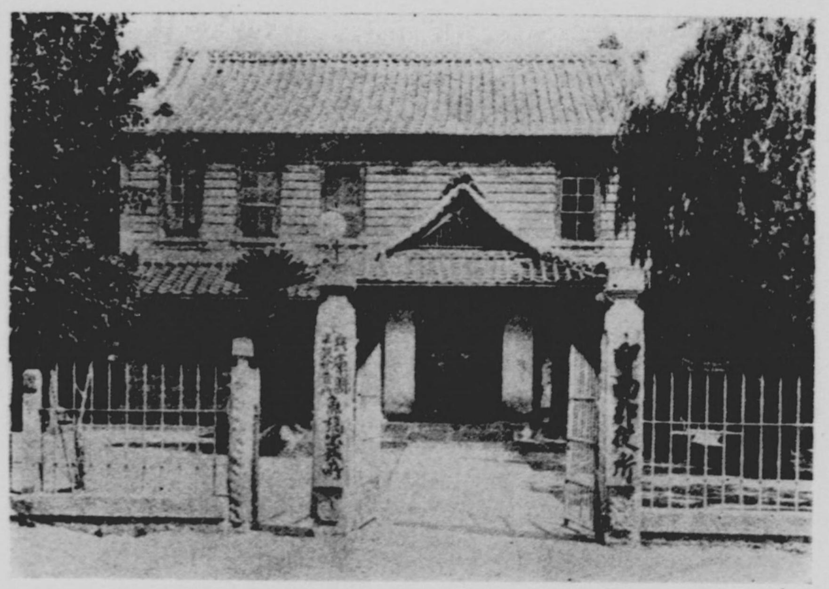
前會長
名譽會員
伊藤長次郎氏

前會長 伊藤英一氏
（明治四十五年）

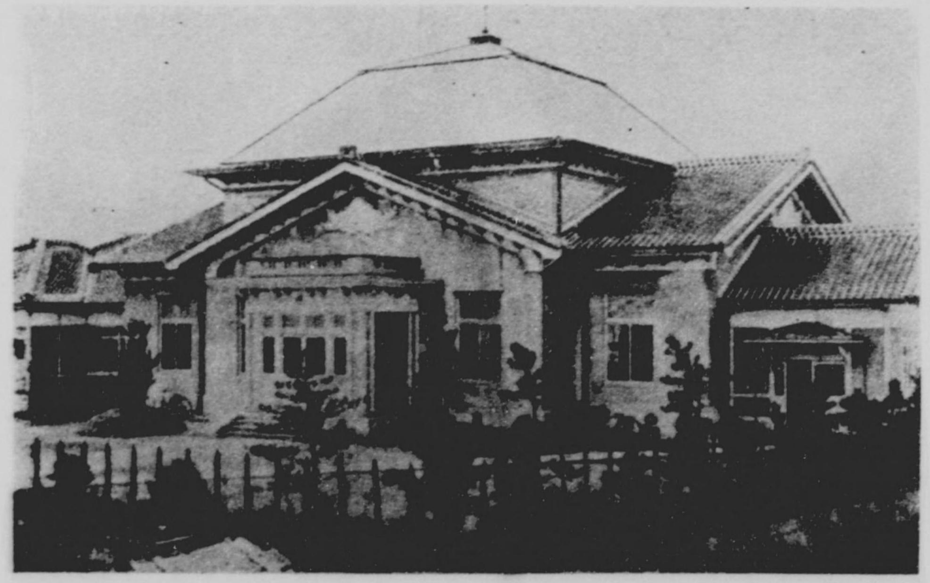
前副會長
名譽會員　大西甚一平氏

前副會長　田中俊次氏
（明治四十五年）

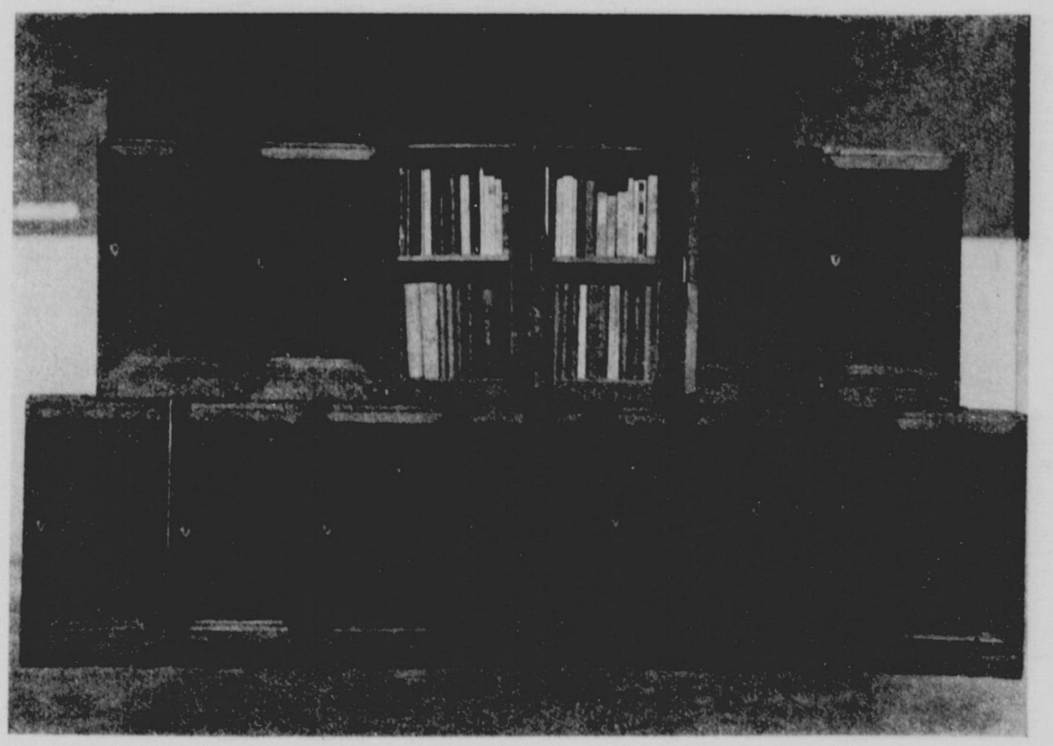
會長　井內中正氏



印南郡役所



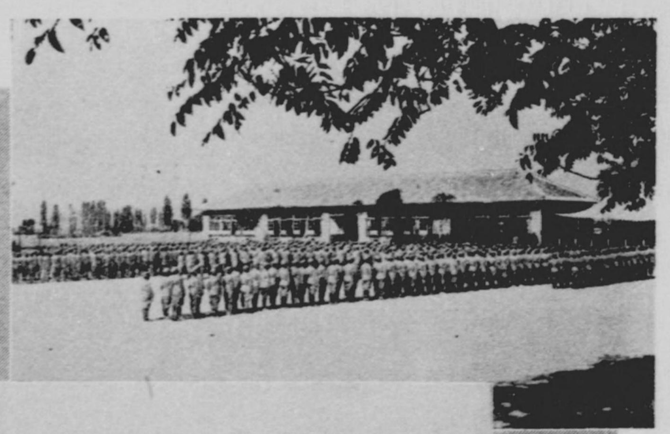
印南郡公會堂

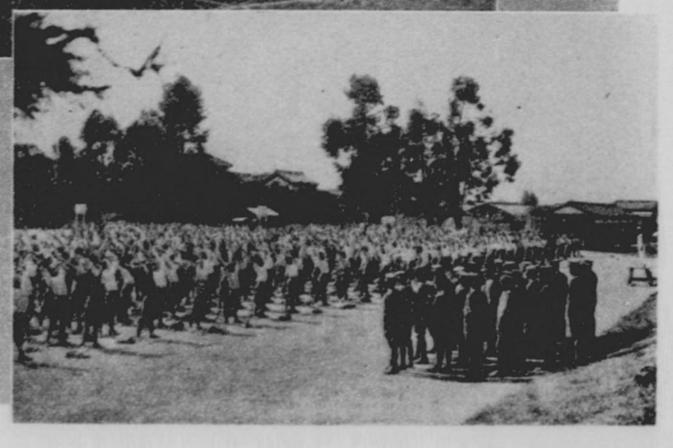


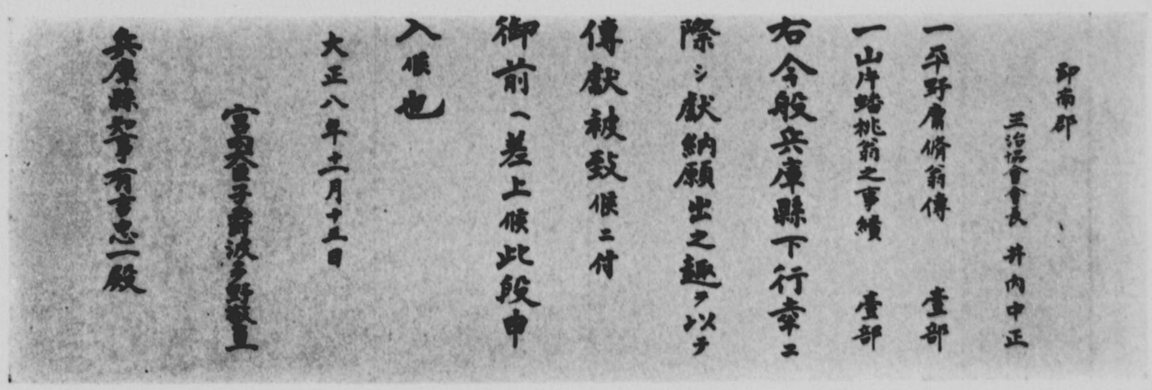
巡回文庫發送之圖

（明治四十一年）

大正十五年十一月三日　第一回青訓大會　伊保校庭







御布部

三治協會會長　井内中正

一平野唐俑箭傳　壹部

一山岸蛤桃箭之事績　壹部

右今般兵庫縣下行幸ニ

際シ獻納願出之趣ヲ以テ

傳獻被致候ニ付

御前ヘ差上候此段申

入候也

大正八年十一月十五日

宮内大臣書狀

宮内大臣

兵庫縣知事有吉忠一殿

選奬狀

印南郡三治協會

多年教育産業及衛生ノコトニ
盡瘁シ其ノ功績顯著ナリ
依テ茲ニ金壹百圓ヲ下付シ
之ヲ選奬ス

大正十三年二月十一日

兵庫縣知事從五位勲三等平塚廣義

表彰文

序

井内中正君は予と姫路中學校の景福寺時代の學友である頃日其主宰せられる印南郡三治協會の歴史を編成して予に一言を需められた三治協會は其創立せられた時より既に二十餘年を經過し其の間地方の改善に自治の發達に多大の貢献をせられたと聞いて居る予は曩に片山蟠桃翁の事蹟と題する仝會の編纂にかゝれる小册子を寄贈せられて益を得ること少からずさて〳〵奇特なる業績をも擧げる會であると敬服して居るが承るところによれば仝會では尙續々播州に關係ある古人の事蹟を調査して之を公にし以て後進の奬勵に資せられるとのことである彌々以て敬服せざるを得ぬ次第である井内君は多忙なる本職をもちながら常に地方公共

の事業に盡瘁せられ近くは縣政に參與して重要の地位にあれらる又縣教育の爲にも絶にず努力せられるのであるかゝる優良なる會がありかゝる優良なる人物のあることは眞に印南郡の幸福である希くは會も君もます〳〵奮勵せられて地方の幸福を增進せられたいものである所感をしるして需めに應ずることゝする

昭和四年五月

文學博士　三上參次

序

往時我が印南郡には教育會、衞生會、農友會の三者ありて個個の軌道を奔れる觀あり、當時余思へらく、事異つて人同じく、費分れて効少し、寧ろ打て一團となし統制を整へ組織を完全にし以て基礎を鞏固ならしむるに如かずと、卽ち之を衆に謀り三會合併して三治協會と命名す、時に明治四十一年一月の事に屬す。

是に於て會の基本金制度を確立し、會の事業は之を廣義的教育に統一し、以て會員の修養、地方開發、社會奉仕等の爲めに盡瘁し自治の補助機關を以て自ら任じたり。

爾來其の所期の目的に向て施設し活動し邁進し來れり、烏兎匆々、茲に滿二十有餘年に達するに及び其の記念史を發刊

せんとす。余は本會創立當初の會長たりし故を以て來て序を求めらる仍て思ふに創設以來會員一致、其の嚮ふ所を一にしたる實績は洵に觀るべきもの尠からざるを信ずると同時に、既往の二十年より將來の十年二十年は世相の推移、思想界の變遷等は本會の活動努力に俟つ所のもの益々大なるものありと信ず、是れ一言を寄せて序文に代ふる所以なり。

昭和四年五月

伊藤長次郎

序

我が三治協會は茲に年を閲すること二十餘年恰も聖上陛下の行幸を記念すべき五月中旬之が記念式を擧げ會史の編纂を見るに至りたるは洵に欣懷とする處なり。

惟ふに二十年の歳月は必ずしも故しと言ふべからず、然れども此間時代の進運に伴ひ各部面の變遷、推移の跡、毎に吾人の意表に出で殆ど端倪すべからざるものあり、然りと雖も會員和衷協力、克く會旨の貫徹を期し、常に健實なる發達を致し、本郡教育、衛生、勸業の進展向上に貢献し、地方自治の發達に努力せられしは深く慶賀に堪へざる處なり、是れ畢竟役員諸氏拮据經營の賜と、會員各位協賛一致の眞情の致す所にして、其功績たる實に偉大なるものあり、然るに不肖短才薄識の身を

以て茲に十數年間徒に會長の任を塞ぎ何等會員各位の期待に副ふの實績を擧げ得ざりしは、寔に慚愧に堪へざるなり、古語に曰く、故きを溫ねて新しきを知ると、自今以往、本會の基礎、益々鞏く、事業の實績愈々擧り、他日、今日を見る、今日の既往に於けるが如くならんことを誓ふ。

今此會史の稿成るに及びて感慨無量、固より未だ盡さざるものあらんも他日機會を得て補正せんとす、尙本史の編纂に當り直接間接各位の援助を與へられたる所少からず終に茲み謹みて其の勞を感謝す。

昭和四年五月一日

印南郡三治協會長　井内中正

印南郡三治協會史目次

沿革……一
事業……二
一、巡回文庫……五
二、講演會……二
三、巡回講話……九
四、夏期講習會……一三
五、婦人修養講習會……一五
六、產婆養成……一五
七、防疫……一八
八、稻作立毛品評會……二四
九、展覽會……二五
一〇、表彰……三二
二、視察員派遣……四一
三、副業奬勵……四一

一三、女教員會援助……四一
一四、青年訓練所大會……四二
一五、女子青年團援助……五〇
一六、會報發刊……五〇
一七、事業附記……五一
光榮……五三
役員……五四
會員……六二
歷代郡長……六二
歷代町村長……六三
歷代小學校長……六六
經費……六九
會則……七四
巡回文庫規定……八〇
教育品展覽會々則……八二

創立二十周年記念
印南郡三治協會史

沿革

我が印南郡には、從來私立にかゝる教育・衞生・農友の三團體ありて、教育・衞生・勸業に於ける改善普及發達を期し、各〻會務に向つて其擴張と振作とに盡瘁し來りしが三會とも、もと別個の機關たるを以て、其間に何等の連絡なく、其活動に於ても往々にして徒事あり、その成果も亦充分ならざる點多々ありき。茲に於て郡內有力者會合協議の結果、前記の三會を合併、印南郡三治協會を組織し、以て三會有機的關係の下に、各部その目的に向つて邁進するに如かずとなし、明治四十年十一月その決定を見たり。仍て從來の會員制度を改め基本金制度とし、創立委員・會員募集委員を選擧し、直ちに會員募集に着手せしに、忽ちにして名譽會員十三名・特別會員五十六名・通常會員壹千貳

拾四名、合計壹千九拾參名の多數を得、其醵出金實に五千九百七拾六圓の巨額に達せり。

茲に於て、時の貴族院議員伊藤長次郎氏を會長に推薦し、明治四十一年一月十二日、郡内時光寺に於て前記三會の解散式と本會の發會式を擧行、各會に於ける功勞者を表彰記念品を贈呈し、次で記念講演會を開催す。當日は服部本縣知事の來臨、谷本文學博士の講演あり、多數の來賓及び數百名の會員出席、頗る盛大なる發會式なりき。

大正十一年五月十六日の臨時總會に於て、會則の變更をなし、本會は專ら教育に沒頭することゝし、衞生部及び勸業部を分離す。同十五年六月郡制廢止さるゝや再び會則を變更し、新に男子青年部、女子青年部、婦人部を設け、その基礎彌々鞏固となれり。

かくして年を閲すこと〻に二十有二、本會の企圖する所着々その効を收め、今や唯一の自治機關を以て自ら任じ、今日に至る。

事業

一、巡回文庫

本會創設事業の第一歩として着手せしは、會員に讀書の便宜を與へ、之によりて豐かなる趣味を養ひ、德性を磨き、智識の開發を目的とする三治協會巡回文庫の設置なりき。本文庫は第一號より第十六號に至る十六箇の書函よりなり、各函每に略〻五六十册の書籍及び雜誌を收め、豫め一定の順序を定めおき、書函を一ヶ月間各村に滯留することゝせり。而して凡ての管理を各小學校長に囑托す。小學校長この文庫を受けたる時、直ちにその書籍目錄表を調製し、區内各會員に通知す。會員にして若し借覽せんとせば、先づ借入れんとする書名・册數・氏名・期限等を記入捺印して、書籍の借入を請求す。斯くして各文庫一周し終れば、新刊書籍との入替を行ふ。明治四十一年七月上旬、巡回文庫發送式を印南郡役所にて擧行、同四十四年四月中旬圖書館令により公認を得たり。

爾來二十有二年、年々多數の新刊書籍を補充し、その内容愈々完備せり。創立以來補充せる書籍のみにても二二三三册に及ぶ。

各年次に於ける巡回文庫閲覽成績左表の如し。

年次	教員	青年	婦人	官公吏	僧侶	神官	醫師	農	商	工	勞働	其他	計
明治四一年度	七二四	一三八	五	一三〇	四八	八	二三	四七五	六八	一三	二	一二五	一七六九
同 四二年度	一三六〇	三二九	六	二三七	一〇二	二〇	五一	八一九	一二四	二一	〇	二九一	三三六〇
同 四三年度	一八〇三	五七二	六二	三一一	二三二	三八	五三	六九〇	二四四	七六	二一	四九	四一五一
同 四四年度	一六六三	六八〇	二八一	一三五	一七一	八	八	四四八	二〇八	一六二	五	三七二	四一四一
同 四五年度	一七五一	六九五	三〇九	一四八	一五三	一〇	一〇	五四六	二一三	一六八	四七	三六五	四四一四
大正一一年度	三七四	七二一	三三五	一九七	一〇九	二三	六四	六三六	二三三	一八〇	七〇	二〇五	四〇三六
同 三年度	二五三〇	一六二六	四八一	一七〇	一七六	一九	八五	一〇六八	二一七	一四一	五六	八八	六六五七
同 四年度	一二四八	六六二	一五三	二五三	九八	二一	五六	七五八	一九六	一〇四	一〇四	二四	三八八五
同 五年度	一三八五	一〇六五	一七一	二八五	九五	一〇	三三	二一二	二一二	一三三	一一八	一六	三七三七
同 六年度	一七三七	一〇六八	二一一	三四八	一〇三	一九	二一	六三六	三三六	一三九	八七	一〇三	四八〇七
同 七年度	一四四八	七三〇	一三〇	四〇五	八〇	一五	四〇	八六〇	一三〇	二二〇	一五〇	〇	四一九八
同 八年度	一七三五	一三五二	一五〇	一六五	四九	五	三一	三五八	九七	一〇九	六九	五	四一二五
同 九年度	一七二六	五二七	一三六	三三一	七六	一三	三八	三八二	一〇八	四九	六七	二五	三三六八
同 一〇年度	一三七五	一〇七七	一二〇	二〇二	八七	四	四〇	二八六	一二八	一一四	三四	五六	三四二三
同 一一年度	八九九	六五九	二〇七	一三二	一〇八	〇	四二	三二〇	一六〇	一三一	二二五	二二三	二九九六
同 一二年度	六二三	七二九	二二〇	一〇七	四六	一六	一〇	二二四	二二〇	一三〇	一二三	八一	二五三七
同 一三年度	七一七	七四二	一三二	九七	五四	〇	七	二二七	二二五	一五〇	一一	一〇三	二五五四

同 一四年度	七五八	七二八	五五	四五	六〇	三	七	二〇四	二二一	一二五	九五	一三一	二四五一
同 一五年度	七三四	八二一	一〇三	九八	四一	三	一五	二七一	六七	一七八	一一〇	一〇八	二五四八
昭和二年	六九八	九二七	六九	四二	四六	一〇	一四	三五一	一三二	一〇五	一二一	九七	二六一二
同 三年	八五二	九四八	八五	五一	三三	八	一九	三二二	一一九	一四二	一〇六	六八	二七五三
總計	二七〇三九	一六七九六	三四〇	三八八九	一九六五	二六一	六六七	一〇二一五	三二四七	二五八〇	一六一〇	二五四三	七四五三三

二、講演會

漸やく萠さんとしつゝある時代思想動搖に對する方策として、本郡中堅の位置にある本會々員の圓滿なる智德の增進をはかり、自治の精神を確立せしめ、思想的病弊を一掃せんが爲、本會に於ては毎年春秋二回知名の士を招聘し、毎回一日乃至數日に亙る大講演會を開催し、本會々員は勿論郡內有志者に、有益なる講話を聞かしむ。創設以來開催せる講演會回數、實に四十三回に及び、毎回の聽衆數百、其稗益する所實に大なるものあるを疑はず。

創立以來開催せる主なる講演會左の如し。

回數	年次	講師	氏名	聽講人員
第一回	明治四一年春季	文學博士	谷本富	七〇〇

第二回	同	秋季	姫路師範學校長	野口援太郎	二三〇
同			明石女子師範學校長	藤堂忠次郎	二〇〇
同			明石農學校長	吉田彦松	二〇〇
第三回	同	四二年春季	京都帝國大學教授	谷本富	六五〇
第四回	同	秋季	姫路中學校長	平澤金之助	二七〇
	同		明石女子師範學校長	井田竹次郎	二〇〇
	同		兵庫縣立工業學校長	大野武一郎	二五〇
第五回	同	四三年春季	岡山醫學專門學校教授	小川銳三郎	三〇〇
第六回	同	秋季	陸軍步兵大尉	中村大尉	九〇〇
	同		大阪市心學大家	山田俊郷	
第七回	同	四四年春季	內務省囑託	留岡幸助	二五〇
第八回	同	秋季	靜岡縣稻取村前村長	田村又吉	二〇〇
第九回	同	四五年春季	兵庫縣內務部長	折原巳一郎	五〇〇
	同		兵庫縣技師	小野孫三郎	
第一〇回	大正	元年秋季	大阪朝日新聞記者　衆議院議員	石橋爲之助	八〇〇
第一一回	同	二年春季	靜岡縣人	金原明善	三〇〇
第一二回	同	秋季		香村宜圓	一八〇〇
	同		太縣米穀檢査所長	井上庫太	
第一三回	同	三年春季	愛知縣農林學校長	山崎延吉	三〇〇

農學士
文學博士
醫學博士
文學士

第一四回	大正	三年秋季	大阪朝日新聞記者	石橋爲之助	六〇〇
第一五回	同	四年春季	愛知縣農林學校長	山崎延吉	四〇〇
第一六回	同	五年春季	明石農學校教諭	辻川巳之助	二〇〇
第一七回	同	六年春季	神戸高等商業學校	津村秀松	三五〇
第一八回	同		縣立神戸病院眼科醫長	西村美龜三郎	三〇〇
	同		縣衛生課技師	飯豐勝三郎	
第一九回	同	秋季	東京市	石田傳吉	二六〇
第二〇回	同	七年春季	京都帝國大學教授	河田嗣郎	三二〇
第二一回	同	秋季	同	同	二五〇
第二二回	同	八年冬季	靜岡縣	山下信義	七〇〇
第二三回	同	九年春季	東京市	久留島武彥	一〇〇〇
第二四回	同	秋季	京都帝國大學教授	藤井健次郎	二七〇
第二五回	同	一〇年夏季		香村宜圓	三一〇
第二六回	同	一一年春季	京都帝國大學教授	佐藤丑次郎	二三〇
第二七回	同	秋季	京都帝國大學教授	小西重直	二〇〇
第二八回	同	一二年春季	大阪府	羅來友吉	三〇〇
第二九回	同	冬季	大阪朝日新聞記者	村上寬	四〇〇
第三〇回	同	一三年春季	大阪高等學校長	野田義夫	三五〇
			本縣學務課長	古川靜夫	

法學博士
文學士
法學博士
文學博士
文學士
文學博士
文學博士
文學博士

第三一回	同	一四年春季	大阪中山口腔衛生研究所長	濱野松太郎	一五〇
			神戸商業會議所書記長	福本義亮	三五〇
第三二回			前三重縣知事	田子一民	三五〇
第三三回	同	夏季	神戸商業會議所書記長	福本義亮	二〇〇
			本縣學務部長	中村忠充	
第三四回	同	一五年春季	京都帝國大學教授	法學博士 森口繁治	三〇〇
第三五回	同	夏季	明石女子師範學校教諭	及川平治	二三〇
第三六回	昭和二年春季		神戸高等商船學校教授	三田亨	四〇〇
			本縣社會課主事	鈴木鐐太郎	
第三七回	同		陸軍少將	奥村拓治	三〇〇
			本縣社會課主事	文學士 小田直藏	
第三八回	同	夏季	本縣學務課長	由良民之助	二二〇
			社會教育主事補	原田淺次	
第三九回	同	秋季	本郡曾根町	文學士 龜田次郎	二〇〇
第四〇回	同		修養團	万代重昌	
				勝部耕造	五〇〇
第四一回	同	三年春季	兵庫縣商工課長	法學士 林信夫	四〇〇
第四二回	同	三年夏季	御影師範學校長	安井清雄	三六〇
第四三回	同	秋季	陸軍少將	伊豆凡夫	四〇〇

三、巡回講話

春秋二季の定期講演會及び臨時開催する講演會のみにては、郡民一般特に中流以下の人々の聽講に便ならざるを以て、別に教育、衞生、勸業の各部に於て、毎年一回以上各村又は最寄部落に巡回講話會を開催し、會員たると否とを問はず、汎く通俗平易を旨としたる有益なる講話を開かしむ。毎回の聽衆三百人を下ること稀にして、而もよく其趣旨を了解するを見る。その効果の直接關接に影響する所、蓋し甚大なるものあらん。

殊に明治四十四年本縣主催の下に、各郡市に於て衞生品展覽會並びに講演會開催の企圖あるを知り、本會は大いに之に賛同し、其趣意を體し衞生部の事業として、同年八月曾根志方の二校に於て、四日間衞生品展覽會並びに講演會を開催せり。展覽品は之を保健、醫事、防疫の三部に區別陳列し、縣廳よりは夫々專門の技師出張、懇篤說明に努められしを以て、一般郡民殊に婦人兒童もよくその理を會得し、衞生思想の普及發達に尠からざる利益を齎らせり。其參觀人實に一萬四十二人にして、郡内戸數に

對し一戸一人一分强に當る。

本會はまた夙に民力の涵養と、勤儉力行の美風を助長せしむることの焦眉の急務なるを認め恒に民心の作興に盡す所あり、大正九年民力涵養に關する縣の訓令發布さるるや、本會は直ちに之に基きて、本郡の實情に適する實行要目を定め、之が趣旨の貫徹を期することに努めたり。卽ち先づ小原七三郎氏片岡源之助氏等を招聘し、民力涵養、國民精神作興に關する巡回講演會、並びに活動寫眞會を開催し、各部落を巡回、地方青年會、婦人會等の覺醒奮起を促し、之が宣傳實行に努めたり。大正十二年國民精神作興に關する詔書を拜し、益々その任務の重且大なるを自覺し、彌々その內容を整へ、其計畫を充實し、民力の涵養に、思想の善導に、或は家庭教育に將又公衆衞生思想普及に、產業の指導に、畢生の努力をつゞけつゝあり。

年次	摘要	聽講人員
明治四二年度	本縣農學校教諭辻川巳之介檢疫醫飯田正千代二氏を聘し、六ケ村にて開催す。	二四〇〇人
同 四三年度	本縣衞生技師葉若雄次氏を聘し、井內衞生部長之に加はり三ケ村にて開催す。	九〇〇
	井內衞生部長三ケ村に於てコレラ病に關する衞生講話會を開催す。	一三五〇
	檜林本縣農事試驗場長を聘し、二ケ村にて開催す。	二〇〇
同 四四年度	本縣農事試驗場技手を聘し、四ケ村にて開催す。	一〇〇〇
	松岡教育部長津田幹事等各村に於て教育講話會を開催す。	四二四〇
	本縣技師の出張を請ひ二ケ村にて四日間衞生展覽會及び講話會を開催す。	一〇〇四二
大正元年度	出川扇一氏を聘し、九ケ村に於て製炭講習會を開催す。	二五〇
同 二年度	正木教育部長、澁谷、林、高谷の三幹事、七ケ村にて教育講話會開催。	二八〇〇
	井內副會長山口幹事魚橋警察署長各村に於て衞生講話會開催。	五〇〇〇
同 三年度	本縣農事試驗場技手を聘し三ケ村にて農事講演を開催す。	七〇〇
	正木教育部長、澁谷、高谷幹事各村に於て教育講話會を開催す。	五七〇〇
	篷添之介氏を聘し、七ケ村に於て農事改良幻燈會開催。	一二〇〇
同 四年度	井內、田中副會長、山內幹事膠チブスに關する講話會を各村にて開催す。	六五〇〇
	郡青年會と協力して郡內各村に於て御大典に關する講話會を開く。	五六〇〇
同 五年度	正木教育部長、高谷、林、幹事各村に於て補習教育奬勵の講演會を開催す。	四七三〇
	井內副會長、山內、石倉幹事各村へ出張衞生に關する講話會を開催す。	二二九〇
同 六年度	石田傳吉氏を聘し、三ケ所に於て町村自治に關する講演會を開催す。	七六〇
	峰田一峰氏を聘し、郡農會と聯合八ケ村にて開催。	一三〇〇
同 七年度	井內會長三ケ村にて衞生講話會開催。	四〇〇
	常見教育部長、圓尾幹事各村に於て教育講話會を開催す。	五五〇〇
	文學士中川日史氏を招聘し、思想問題につきての講演會を四ケ村にて開く。	一九〇〇
同 八年度	縣社會課小原七三郎氏を聘し、各村に於て民力涵養講演會開催。	二八〇〇

同九年度	片岡源之助、小原七三郎二氏を招聘し、各村に於て民力涵養講演會を開催す。	三一〇〇
同一〇年度	小原七三郎氏を招き、八ケ村に於て民力涵養講演會を開催す。	二三九〇
同一一年度	津田要平氏を聘し、通俗教育活動寫眞及び講演會を郡内各町村にて開催す。	三七八〇
同一二年度	大阪朝日新聞社村上寛氏を招き、各町村に於て巡回講演會を開催す。	五六四〇
同一三年度	氷上郡圓通寺住職若生國榮師を聘し、國民精神作興に關する講演會を各町村に開催す。	三九五〇
同一四年度	津田要平氏を招聘し、家庭教育に關する活動寫眞並びに講演會を開催す。	六四〇〇
同一五年度	大阪朝日新聞社村上寛氏を聘し、各町村に於て家庭教育に關する講演會を開催す。	二九八〇
昭和二年度	津田要平氏を講師とし、各町村に於て婦人を主としたる講演會及び活動寫眞會を開催せり。	四五〇〇

四、夏期講習會

本會は本郡内各小學校の教職に在る人々の爲、並びに將來小學校教育に從事せんとする者の實力補充及び修養の機關として、毎年斯界の權威者を講師とし夏期講習會を開催し來れり。毎回の出席聽講者、郡内のみにても二百名を數へ、他郡市よりの出席受講者も頗る多し。是等の講習によりて一般教育者の實力向上し。實際教育上に現はるゝ成績に於ても、頗る顯著なるものあり。

左に開催以來の主なる講習科目、並びに講氏の氏名を掲げん。

年次	開催日數	科目	講師	氏名
明治四一年度	八日	宗教と倫理	第三高等學校教授	野々村直太郎
同四二年度	五日	應用化學	神戸高等商業學校教授	大山爾也
同四三年度	一〇日	圖畫手工	廣島高等師範學校助教授	山田權三郎
同	同	教育	兵庫縣視學	草川清
同四四年度	一〇日	法制と經濟	東京高等師範學校教授	中島信虎
同四五年度	五日	地理歷史	御影師範學校教諭	曾我豊吉
大正三年度	六日	教育學	東京高等師範學校教授	佐々木秀一
同四年度	五日	教育學	同　右	保科孝一
同五年度	三日	憲政と自治	京都帝國大學教授　法學博士	佐藤丑次郎
同六年度	三日	書方	神戸湊川小學校訓導	濱田秀穗
同	四日	動的教育	明石女子師範學校附屬訓導	上瀧誠一
同	五日	體操	姫路中學校教諭	倉敷哲一郎
同七年度	七日	博物學	姫路師範學校教諭	阪本長藏
同	同	同	明石女子師範學校教諭	井上光治
同八年度	六日	法制	印南郡長	澤慶次郎
同	同	租税について	姫路税務署長	中村重喜
同	同	科學について	京都帝國大學助教授	大森貫一

同九年度	五日	家事	明石女子師範學校教諭	前田キク	
同	五日	國語教授の本領と新教科書の取扱	文部省囑託	友納友次郎	
同一〇年度	三日	教育改造の原理	東京成城小學校主事	鯵坂國芳	
同一一年度	四日	新主義算術	奈良女子高等師範學校附屬教諭	仲本三二	
同	二日	律動體操	東京體操學校	林秀一	
同一三年度	八日	理科教授の實際	鳥取師範學校教諭	横尾新太郎	
同	同	音樂	東京音樂學校	佐々木英	
同一三年度	八日	教育と心理學上の問題	文學博士	塚原政次	
同	同	精神科學の哲學	廣島高等師範學校教授	勝部謙藏	
同	同	劇と人生	文學士	小山内薫	
同	同	音樂上の諸問題	東京市視學	田村虎藏	
同一四年度	五日	歐米の音樂教育	同	同	
同	同	國民道德		紀井正美	
同	同	哲學	廣島高等師範學校教授	勝部謙藏	
同	同	歐米の家事教育	奈良女子高等師範學校教授	越智キヨ	
同一五年度			郡政廳止につき事務整理の爲中止す		
昭和二年度	三日	讀方教授	東京	蘆田惠之助	
同三年度	三日	教育と哲學	東京帝國大學助教授	入澤宗壽	

五、婦人修養講習會

小學校卒業後男子にありては補習夜學校あり、各部落に青年會の組織ありて、補習教育の施設稍〻整へるも、女子に至つては更にその設なきを以て、本會は女子補習教育の一助として、明治四十一年以來婦人修養會を各村に開かしめ、その經費の一部を負擔し其奬勵に努めたり。開期は農閑の時期を撰び一週間乃至二週間にして其課目を一定せず、土地の狀況に應じて適宜定めしむることゝせり。科目は修身、裁縫、家事作法、育兒、看護等にして、生花、造花、抹茶、料理法をも加ふることあり。講師は多く其村小學教員にして、熱心事にあたり、從つて一般家庭に歡迎せらるゝの狀況にあり。啻に妙齡の婦人のみならず、一家の主婦にして出席するもの少なからず。毎回出席人員少くも三十名を下らず。多きは八九十名に達し、前途有望なる事業たり。

六、產婆養成

產婆は衞生上に於ける最も重要なる機關の一なり。姙娠は勿論生理的現象にして、

危險なるものにあらざるも、其取扱の不充分なるか、或は不注意なるか、將又その發見と處置の當を得ざりしが爲に、可惜母子の生命を危險に陷らしむること、社會には往々之なきにあらず。産婆の職責や實に重且つ大なりと云ふべきなり。かく觀じ來れば、彼等に特に秀でたる學力、熟練せる技術、明確なる判斷を要するや論を待たず。

明治十九年以來本郡の事業として、或は又私立衞生會の事業として産婆講習會を開催し、業務上の研究を進め、或は産婆生徒養成に盡し來れり。然るに當時は一般に産婆なるものを一の賤業者として、蔑視するの惡習慣あり。從つて教育に素養ある者にして之に應ずる者極めて稀にして、その能率を充分あぐる能はず。其局に當るものゝ常に遺憾とせし所なりき。而して當時の狀態を見るに、本郡内産婆の員數は五十四名（他に試驗免許産婆三名あり）にして、其年齡は文久三年生れを始とし、文化十二年生れの老媼に至る、その平均年齡實に六十七年弱に當る。

茲に於て本會は産婆養成の必要に迫れるを認め、パンフレットにより、或は講演會により産婆の必要なる所以を鼓吹し、以て從來の慣習打破に努め、他方廣く郡内より相當教養ある女子を選拔し、之に手當を支給し、産婆養成の施設ある病院に囑託し、

專らその養成に力めたり。然れども經費なほ充分ならず、一時に多數を養成することは不可能なるをもつて、毎年一名乃至數名づゝとし、漸次郡内町村に一名以上の試驗免許産婆を配置するの方針をとり、今や全くその目的を達したり。

本會にて養成せし産婆は三十二名にして、各年次に於ける養成人員左表の如し。

年次	養成人員	囑託所
明治四一年度	一	神戸市 古川病院
同 四二年度	二	同 右
同 四三年度	五	日本赤十字社兵庫支部 姫路赤十字病院
同 四四年度	四	同 右
同 四五年度	三	同 右
大正二年度	三	同 右
同 三年度	二	同 右
同 四年度	二	同 右
同 五年度	二	同 右
同 六年度	三	同 右
同 七年度	二	同 右
同 八年度	二	同 右

同	一
九年度	同
通計	右
	三二

七、防　疫

不幸にして本郡内に傳染病の發生ある時は、本會は直ちに該傳染病豫防心得の印刷物を配布し、尙その部落又は各村に出張、衞生講話會を開催し、傳染病の流行は一に衞生思想の缺くるに起因することを高潮し、傳染病豫防に關する注意を促し、豫防及び消毒上多大の効果あるを認めたり。又一部落に流行せし犬毒恐水病、ヂフテリー等に對しても、同じく印刷物を配布し、その注意を促せり。

殊にトラホーム眼病患者は郡内各村に多數あり、南部町村特に猖獗を極めつゝあり。よつて各戸に豫防心得を配布し、又はトラホーム豫防に關する講演會、或は活動寫眞會を開催し、患者統計表をつくりて學校役場に配布する等、あらゆる撲滅法に腐心しつゝあり。

防疫活動概況

年次	摘要
明治四二年度	十月曾根村に直性コレラ患者發生、忽ち傳播して十名の患者を出し、尙蔓延の虞ありしを以て、コレラ病消毒方法及び豫防心得を印刷配布せり。
大正三年度	「トラホーム」の憂延年を逐うて甚しき傾向あり。縣廳に於ては町村を指定して、治療を施行せしめつゝあり。依つて本會は「トラホーム」豫防心得三千枚を印刷配布し、豫防及び治療の一助とせり。
同四年度	的形村に膠チブス患者發生、蔓延の傾向あり。依つて本會は該病豫防心得を印刷し。郡内一般に配布してその注意を喚起し、もつて警戒に努めたり。
同六年度	膠チブス豫防心得を印刷し、大鹽外數ケ村に頒布せり。伊保村に於て衞生幻燈會並に講演會を開催し　該病に對する注意を促す。郡内小學校兒童の寄生蟲檢査をなす。
同七年度	膠チブス發生せしを以て、井内會長各村に出張、衞生講話をなす。同病豫防心得四千枚を印刷配布す。「インフルエンザ」流行につき、その豫防心得を一万枚印刷配布す。
同八年度	コレラ豫防法を印刷し、各町村に配布す。九月一日兵庫縣令第四八號を以て「トラホーム」豫防法施行細則改正の件發布さる。依りて本會は直ちに豫防心得二萬枚及び同病豫防法及び細則二百部を印刷に附し、豫防心得は各町村へ送附し各戸に配布、トラホーム」豫防を宣傳す。
同九年度	曾根町外二三ケ村に於てコレラ患者發生ぜしをもつて、之が豫防心得及び數へ歌を印刷配布す。各町村壯丁「トラホーム」患者比較表をつくり、各町村役場及び學校に送る。
同一一年度	左記三種の冊子を購入し、町村小學校、郡會議員に配布し、その趣旨宣傳に努めたり。國民と結核、醫師の來るまで、お産の前後。
同一二年度	内務省衞生局發行の左記冊子を購入し、町村役場及び學校に配布せり。

同　一三年度

夏と子供、冬と子供、國民と結核。

内務省衛生局編輯にかゝる左記冊子を購入し、各小學校及び町役場に配布す。

齒と健康、近視の豫防。

中山太陽堂編輯にかゝる、讀本を購入し、各小學校に數部づゝ配布せり。

印南郡小學校兒童腸寄生蟲卵檢査成績一覽表

校名	檢査人員	十二指腸蟲卵	蛔蟲卵	鞭蟲卵	横川吸蟲	十二指腸蟲百中歩合
曾根校	二四	二	二一	一六	一	八・三
大鹽校	三〇	一	二五	二五	一	三・三
北濱校	二四	四	二四	二四	一	一七・〇
伊保校	一五	一	一二	一三	一	六・六
別所校	七〇	七	四二	四〇	一	一〇・〇
的形校	七一	五	三一	二九	一	七・〇
阿彌陀校	四七	二	二三	二六	一	四・三
米田校	四一	六	二二	一九	二	一四・六
東神吉校	二八	二	一四	一二	一	七・一
平荘校	四三	一	二二	二〇	一	二・三
上荘校	二三	一	一一	九	二	四・三
志方校	七二	七	五五	五二	一	九・七
西志方校	六二	二	四六	四三	一	三・二
四神吉校	六三	二	三〇	二七	一	三・八
計	六一三	四三	三七八	三五五	四	七・二

本郡小學校兒童トラホーム患者調

	大正四年度 患者數	百中歩合	順位	大正五年度 患者數	百中歩合	順位	大正六年度 患者數	百中歩合	順位
曾根校	二六二	四二・五七	一五	二二八	三六・九五	一六	二三八	三八・一四	一六
伊保校	一七五	一一・一五	四	一六二	一八・八五	一一	一七八	二〇・三二	一一
米田校	七〇	一四・三四	九	六七	一三・四三	七	八二	一六・〇八	八
東神吉校	九七	一八・〇三	一一	四五	八・〇四	一	五六	九・八二	二
平荘校	六三	九・四四	二	八二	一三・〇六	六	九六	一四・五九	五
上荘校	三六	一〇・三二	三	七四	二〇・〇〇	一二	五四	一四・六七	六
東志方校	七一	一一・一六	五	八二	一二・七七	五	九六	一四・七七	七
四志方校	五五	一一・四六	六	五一	一〇・四九	二	三二	六・五八	一
志方校	八四	一五・二四	一〇	八八	一五・四一	九	一〇七	一九・一八	一〇
四神吉校	一一八	二二・八二	一三	七六	一四・八四	八	一六〇	三一・三一	一四
阿彌陀校	八一	一四・三一	七	六二	一一・一一	四	七三	一二・四七	四

壯丁トラホーム患者調

町村名	大正四年度 患者數	百中歩合	順位	大正五年度 患者數	百中歩合	順位	大正六年度 患者數	百中歩合	順位
曾根	一五	四四・一二	一四	一二	三八・七	一一	一六	五〇・〇〇	一一
伊保	一五	三四・〇九	一一	一七	四〇・四	一二	二四	四八・〇〇	一〇
米田	四	一二・一二	二	九	二三・六	七	六	一八・七五	四
東神吉	五	一二・八二	四	五	二一・七	五	六	一五・〇〇	二
平荘	三	六・八二	一	七	一七・五	三	九	二一・九二	五
上荘	四	一四・八七	五	一	四五・四	一三	六	一五・〇〇	二
東志方	七	一七・九五	八	五	一〇・六	一四	九	一六・六六	三
志方	五	一八・五二	九	四	二〇・〇	一一	九	二九・四一	九
別所校	一六一	二九・八七	一四	二〇・五六	一一・九	一三	一〇八	一八・五九	九
的形校	二七二	四七・六四	六	二〇一	三三・二二	一五	一九〇	三二・二六	一五
北濱校	四六	一四・四八	八	六五	二一・八一	一二	六五	二一・六七	一三
大鹽校	一五一	二〇・四三	一二	二四三	三〇・三四	一四	一七一	二一・〇八	一二
國包校	一三	九・二二	一	一五	一〇・八九	三	一五	一一・二八	三
計	一七五五	二〇・五六		一六六〇	一八・四八		一七二一	一九・四六	

印南郡學童齲齒調査表

學校＼年齡	七年 檢査數	齲齒數	八年 檢査數	齲齒數	九年 檢査數	齲齒數	一〇年 檢査數	齲齒數	一一年 檢査數	齲齒數	一二年 檢査數	齲齒數	一三年 檢査數	齲齒數	一四年 檢査數	齲齒數	計		百分比	順位
西志方	五	一七・二四	七	二九・六	九	二四・三二	七	二九・六	八	二九・六	九	二四・三	一	一六〇	九	二四・三二	三一・九三	一二	七四・一九	六
西神吉	四	一二・五〇	三	二三・五	六	二〇・〇	四	二〇・〇	四	二五・七	六	二〇・〇	六	二五	六	二〇・〇	二四・三	六	五〇・〇〇	一一
阿彌陀	六	一五・〇〇	六	二三・六	一〇	三七・五	一二	一〇〇	一〇	三七・五	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	二八・五七	八	二七・〇七	七
的形所	一一	二八・九四	一三	一六・〇	一三	一六・〇	一三	一〇〇	一三	一六・〇	一三	一六・〇	一三	一〇〇	一三	一六・〇	二四・三二	六	二四・三二	六
別所校	一三	四三・六三	八	二四・九	一二	二八・九五	一二	一〇〇	一二	二四・九	一二	二八・九五	一二	一〇〇	一二	二八・九五	五二・二七	一二	七四・一九	一二
大鹽	二二	五二・二七	一三	二五・七	一四	三八・九五	一五	一〇〇	一五	二五・七	一四	三八・九五	一五	一〇〇	一五	二五・七	二三		五七・八	一
曾根	八二	七七	一〇三	九四	九六	八一	一一〇	八〇	八六	六四	一〇二	六〇	二	二	〇	〇	五七八		四五八	七九・二四
阿彌陀	八二	七七	七九	六六	八七	七三	九八	七〇	七二	四〇	九三	五二	三	一	〇	〇	五一四		三七九	七四・七四
國包	一七	一五	一四	二四	一八	一二	一八	一三	二四	一五	一七	一二	〇	〇	〇	〇	一一八		八四	七一・一九
別所	七八	四七	九七	八六	八四	六八	八七	五七	一〇〇	五六	八八	三四	一三	五	〇	〇	五四七		三五一	六六・〇〇
大鹽	一三	一〇八	一一	一五六	一三六	九九	一四一	一〇三	一三六	七二	一三六	六七	〇	〇	〇	〇	七八三		五〇五	六五・七九
上荘	五九	四四	五三	二九	六一	四五	五一	四三	五九	二八	四八	二三	〇	〇	〇	〇	四五五		二九六	六五・〇五
計																				
學校別																				

米田	一〇三	七七	一〇〇	七九	九三	五三	一〇〇	五六	九三	四七	一一四	二八	〇	〇	〇	〇	〇	六〇三	三四一	五六●六六	七
東神吉	九四	六七	九二	五八	一〇五	六二	八九	五四	一〇二	四五	八四	二七	一	〇	〇	〇	〇	五七二	三一三	五四●七二	八
東志方	一〇〇	七八	一〇八	六六	八六	四六	一〇四	四九	九二	四〇	九一	三五	五	一	〇	〇	〇	五八一	三一四	五四●〇四	九
的形	七八	二五	九三	五六	八四	五九	九四	六二	八四	三七	八五	四〇	三	一	〇	〇	〇	五三〇	二八〇	五三●八五	一〇
平莊	一〇六	八〇	一一五	八〇	一〇四	五七	一〇二	六〇	九〇	三七	一一五	二五	九	四	〇	〇	〇	六四一	三四三	五三●五一	一一
西志方	五八	三七	七六	五一	八〇	五二	八五	四五	八六	三八	六九	二三	八	一	〇	〇	〇	四六二	二四六	五三●二四	一二
北濱	四七	二五	四〇	二三	六六	四〇	五二	二六	四四	二一	五三	一七	〇	〇	〇	〇	〇	三〇二	一五二	五〇●三三	一九
西神吉	七四	四五	八四	五三	九〇	五八	八八	四〇	九七	三四	八九	三三	一	一	〇	〇	〇	五二八	二六四	五〇●一〇	一四
伊保	一〇九	四一	一二六	六六	一一九	七〇	一二九	八一	一四二	八三	一三〇	三七	〇	〇	〇	〇	〇	七五五	三七八	五〇●〇七	一五
志方	七一	三八	九一	二三	七五	二六	九五	一九	九六	一九	八一	九	六	〇	〇	〇	〇	五一四	一三四	二六●〇七	一六
計	一二九一	八八三	一三九二	九〇六	一三八四	九〇〇	一四四三	八九六	一四〇三	六七六	一三九八	五三〇	五〇	一四	一	〇	〇	八三五一	四七五四	五六●九六	
百分比	六八●三二		六五●〇九		六五●〇三		五九●三二		一四●〇五		三七●四九		二八●〇〇		一〇●〇〇			五六●九六			

八、稻作立毛品評會

米作は本郡主要の農産物たるを以て、本會は米作奬勵の一助として、明治四十一年以來稻作立毛品評會を開催し、本會々員及び農事講習修得生に限り出品せしむることせり。

審査は之を第一次、第二次に區別して行ひ、審査長は特に縣農事試驗場より派遣を請ひ、第二次の審査を經て之を確定、それ〴〵表彰し、もつてその奮起を促せり。後年之を郡農會の事業に移し、專ら之が援助に力めつゝあり。

開始以來の出品點數、及び受賞點數左の如し。

年次	出品點數	受賞人員					計
		一等	二等	三等	四等		
明治四一年度	三二五	三	一〇	二〇	三三		六七人
同 四二年度	三七〇	五	一五	三〇	四五		九五
同 四三年度	三六一	六	一三	三一	四一		九三
同 四四年度	四八〇	五	一二	三三	六五		一一三

九、展覽會

(イ) 農具展覽會

大正五年二月十日より十二日に至る三日間、郡内米田尋常高等小學校にて農具展覽會を開催せり。出品點數二三七點、出品人員六八名にして、豫想以上の出品を得たり。

觀覽人は毎日四百名を下らず、適切なる施設にして、將來農事の改良發展に資すること大なるものありき。

（ロ）教育品展覽會

大正元年十月十二日より十七日に至る六日間、伊保尋常高等小學校に於て開催せり。郡内各小學校兒童全部の書方、圖畫、手工の成績品、郡内小學校教員各自の研究になる各種の方案及び教授用具、郡内各裁縫學校、お針屋及び有志婦人の裁縫手藝品、縣下各郡市並に全國初等教育、中等教育の公立學校に於ける書方、圖畫、手藝品の一種乃至三種の成績品、東京實業之日本社の蒐集にかゝる全國各郡市より精選せる書方、圖畫の成績品、理科器械の實驗說明、其他郡内の生產物及び青年會員の書方、製作品等にして、其出品點數二萬四千六百七十三點に達せり。

開期中には大阪朝日新聞記者の講演あり、大阪每日新聞社の活動寫眞あり、教育講談あり、尋常科五年以上男女兒童の全郡聯合運動會等ありて、實に盛況を極めたり。されば時の縣事務官田中勝之丞氏、縣視學小原龜松氏を初め、各郡の視學小學校長、訓導、大阪朝日、大阪每日、神戸の新聞記者等特別參觀人を始とし、郡内有力者より老媼に至る迄、來觀するもの甚だ多く、其數二萬九千餘人に及べり。

本展覽會に於ける出品及受賞點數左の如し。

種別	出品點數	入賞點數
郡内小學校	一七二二一	一〇九
郡内裁縫學校お針屋及び處女會	七八六	六三
郡内小學校教員	五五五	三二
縣下小學校	三〇二三	—
縣外小學校	二六八三	—
縣下中等學校	二九七	—
其他	一一八	—
計	二四六七三	二〇四

（ハ）郡内生產品展覽會

大正三年十一月二十七日より二十九日まで三日間、阿彌陀尋常高等小學校にて開催せり。

出品種類百六十餘種、出品點數四百三十一點、出品人員二百二十三名にして、殆ん

ど郡内生産品の凡てを網羅せり。

縱覽者は時あたかも農繁期に際したりしも、毎日五百人以上に達せり。尙開催中郡内小學校の圖畫、書方の成績品展覽會を附設し、二十八日には大阪朝日新聞記者石橋爲之助氏を招聘し、歐洲戰亂に就きての講演會を開催、夜は活動寫眞會を催したり。

從來生産品展覽會の開催は、明治十九年農産物共進會を初めとし、俵裝、蔬菜、或は家禽家畜等の品評會ありしも、皆一部分に限られたるの觀あり。今回は大いに趣を異にし、郡内生産物全部を網羅せしを以て、郡民の自覺を促し、將來の進步發達に資せしこと大なりき。

(二) 創立十週年記念展覽會

大正八年四月七日より同月九日まで三日間、曾根尋常高等小學校に於て、創立十週年記念展覽會を開催せり。

開催中は天氣晴朗にして、郡内各小學校生徒並に父兄、郡外有志の參觀するもの豫想外に多數にして、其混雜名狀すべからざる盛況を呈せり。第一日は校庭に於て郡内各小學校生徒の體操會競技會を開催し、第二日は曾根町青年會主催の青年角力の催ありて盛況を極めたり。第三日は本會の關係者、創立以來の功勞者、並びに郡外教育關係者約百八十名を招待し、本會創立十週年記念祝賀式を擧行、澤本郡長の告諭、澁谷教育部長の報告、岩佐縣視學の概評、其他來賓の祝辭演說、會長の答辭等ありて、嚴かに式を終了し、式後天滿宮前の松林にて祝賀宴會を催したり。

展覽は教育、勸業、衞生の三部にして、郡内各小學校の出品にかゝる教授用具に付き、本縣視學岩佐寅之助氏及び、姫路師範學校教諭宇仁善太郎氏審査の結果、左記六校に賞狀に金員を添へ表彰したり。

一、曾　根　校　　大　鹽　校
二、的　形　校　　志　方　校
三、別　所　校　　西　志　方　校

本展覽會出品物及び其點數左の如し。

一、教　育　部

教員製作品

兒童製作品

種類	點數
實驗具各種	三五七種
標本	一四六
教授用具	三一
其他	一六三
參考品	
貝類	二三五
腊葉	二三四
各種エハガキ	五三四五

種類	點數
書方	二一二點
圖畫	一四二
手工	七五〇
理科實具	二四
體操具	三
裁縫	六六八

縣下他郡市よりの學校兒童出品物

種類	點數
書方	三九九
圖畫	二七二
計	六七一

二、勸業部

郡内各町村よりの出品點數、あらゆる生産物を蒐めて、合計六〇八點に及ぶ。

郡内各町村よりの勸業出品物及び點數調

出品物	點數	出品物	點數	出品物	點數	出品物	點數
一、清酒	八四	醬油	八	酢	八		
シヤツ	一	靴下	三八	各種木綿	一六		
タオル	一八	綿ネル	三	綿	二		
自轉車	一	煉瓦	七〇	米	二		
俵	五	繩	五	莚	五		
鹽叺	五	叺	五	製繩機	一		
除草器	三	瓶	一五	水車	一		

燐寸	六八	印刷物	七	火鉢	一
鎌貝	二七	釘	二	鋏	二
鍬萬	三	石	一	粗摺白	一
豆唐	一	莫	五	算盤	二
粕削					
傘メリヤス針	一三	慰斗	二一		
食鹽	三	洋燈芯	二		一〇
提灯	三	肥料	二	養蜂龍	三
菓子	三	雞卵	二四	麻裏草履	五
味噌	二	昆布	二	湯葉	二一
氷蒟	四	雜品	七二	合計	六〇八點

三、衛生部

縣下美囊郡三木町廣瀬美津喜氏より借入れたる衛生の標本、蠟細工品、掛圖等、二〇〇點の參考品を陳列し、一々其說明を與へ、大いに衛生思想の發達を促し、好成績を得たり。

一〇、表彰

小學校教育に從事せる人々優待の目的を以て、郡内に於て十ヶ年以上勤續せる教員に對し、本會より感謝狀に記念品を添へて贈呈することゝし、明治四十三年來實行せり。

方今人情漸く輕薄に流れ、農工商の何れを問はず其使用人の風紀殊に頹廢し、質樸勤儉主家に忠實なる者極めて尠きを見る。依つて本會は四十三年以來、絶えずそれ等の使用人中、その性質に於て、素行教育程度乃至家庭の狀況勤務年數等に於て、鄕黨の模範とするに足る者を選び、それ〴〵記念品を贈りて表彰することゝせり。

(イ)明治四十四年五月二十一日、本郡公會堂に於て、郡内十ヶ年以上勤續せし教員正木角三郎外十二名を表彰し、感謝狀に記念品を添へて贈呈す。

(ロ)大正元年五月優良教員三名を選びて表彰し、記念品を贈呈す。

(ハ)大正十一年十一月十三日學制頒布記念事業として、本郡内勤續十五年以上の左記教育功勞者に對し感謝狀を贈呈したり。

勤續 十五ヶ年	米田校	正木榮治郎
同 十五ヶ年	北濱校	田中貞太郎
同 十六ヶ年	東志方校	宮永兼二
同 十八ヶ年	志方校	萬永儀三郎

同	十八ケ年	平莊校	木村鐵太郎
同	十八ケ年	東神吉校	石原芳藏
同	十八ケ年	西志方校	竹中勢次
同	十八ケ年	大鹽校	林春次
同	十九ケ年	志方校	長谷川孝太郎
同	二十ケ年	別所校	龜川敎順
同	二十二ケ年	阿彌陀校	北野甚次
同	二十四ケ年	西神吉校	大西成巳
同	二十四ケ年	北濱校	金川善之助
同	二十九ケ年	平莊校	岸本六次

各通

本郡内ニ於テ職ヲ奉スルコト多年其功勞尠カラス依ツテ學制頒布五十年記念式ニ際シ銀杯壹個ヲ贈呈シ感謝ノ意ヲ表ス

大正十一年十月三十日

印南郡三治協會長　井内中正㊞

(二)明治四十四年五月二十一日、本郡公會堂に於て郡内模範職工、男子七名女子七十一名の表彰式を擧行し、夫々記念品を贈る。

模範職工男女別調

町村名	男	女	計
曾根町	一	二	三
伊保村	二	一	二
米田町	一	一	二
東神吉村		二	二
上莊村		三	三
東志方村		三	三
西志方村		五	五
志方村		五	七
西神吉村	二	二	四
阿彌陀村	一	四	三
小計	七	二七	三四
稻岡工場	一	四	四
計	七	七一	七八

(ホ)大正元年郡内模範職工男子六名女子六十六名に對し記念品を贈りて之を表彰す。

(ヘ)大正十一年五月十六日、郡公會堂に於て郡内忠僕貞婦等の善行者の表彰をなしたり。

（表彰文寫左の如し）

表彰狀

曾根町　庵原榮吉

資性溫順明治三十四年曾根尋常高等小學校使丁トシテ其職ニ從事シ爾來二十二年一日ノ如ク忠實精勵其職ニ盡シ亦克ク兒童ヲ愛撫スル等他ニ稀ニ見ル良使丁タリ依テ木杯壹組ヲ贈リ茲ニ之ヲ表彰ス

大正十一年五月十六日

印南郡三治協會長　井内忠正㊞

伊保村　馬場石松

資性朴直ニシテ明治三十七年伊保村役場使丁ニ職ヲ奉シ爾來克ク其職ニ精勵シ殊ニ村内ノ事情ニ精通シ事ニ當リテ機宜ノ處置ヲ謬ラス他ノ使丁ヲ指導誘掖スル等範トスルニ足ル仍テ木杯壹組ヲ贈リ茲ニ之ヲ表彰ス

伊保村伊達サク内　松浦菊藏

明治二十五年伊達家ニ入リ爾來三十有一年一日ノ如ク仕ヘ粉骨碎身主家ノ勞務ニ服シ嘗テ不滿ヲ洩サス身ヲ持スルコト簡素ニシテ克ク微細ヲ貯ヘ家運自ラ裕ナリ其性行奇特ナリ仍テ木杯壹組ヲ贈リ茲ニ之ヲ表彰ス

米田村　伊藤よう

資性溫良大正二年其夫病ヲ得テ起居ノ自由ヲ失フヤ眞情ヲ吐露シテ看護ニ努メ毫モ倦怠ノ色ヲ見セス傍ラ子女ヲ教養シ又老母ニ付フルコト至孝且病夫ニ代リテ克ク家政ヲ執リ家庭常ニ圓滿ナリ寔ニ模範トスルニ足ル仍テ木杯壹組ヲ贈リ茲ニ之ヲ表彰ス

東神吉村　西村三次郎

資性謹直克ク農業ニ從事シ社會公共ノ事業ハ熱心之ニ當リ自ラ進ンテ道路ヲ修シ又消防組小頭トシテ盡瘁スル等寔ニ篤行多シ仍テ木杯一組ヲ贈リ茲ニ之ヲ表彰ス

勤儉克ク產ヲ興シ神佛ヲ尊信シテ鄉黨ヲ化シ同情ニ富ミテ孤獨ニ施シ公共心厚クシテ絕ヘス道路溝渠ヲ修シテ自ラ樂シム其性行誠ニ奇特トス仍テ木杯一組ヲ贈リ之ヲ表彰ス

平莊村　西川音吉

玲瓏玉ノ如キ心情ハ家庭ヲシテ常ニ春タラシメ慈愛ヲ盡シテ大ニ子女ノ教養ニ努メ勤勞夫ヲ扶ケテ一町歩ヲ耕シ節約漸ヲ追ツテ產ヲ成ス其篤行範トスルニ足ル仍テ木杯壹組ヲ贈リテ之ヲ表彰ス

上莊村　畑とめ

資性溫厚ニシテ寡言櫻井織物工場ニ通勤スルコト五年專心職ニ從ヒ同僚ニ交ルコト親密ニシテ每期工場主ヨリ賞與ヲ受ク寔ニ範トスルニ足ル仍テ木杯壹組ヲ贈リ之ヲ表彰ス

志方村　平田よね

天資誠實明治四十年西志方村役場使丁ニ雇用セラレ今日ニ至ル終始一日ノ如ク其職務ニ勉勵シ身ヲ持スルコト簡素ニシテ紙片ノ微ト雖忽ニセス稀ニ見ルノ忠僕ナリ仍テ木杯壹組ヲ贈リ之ヲ表彰ス

西志方村　永田勇吉

資性溫厚ニシテ友情厚ク公共的精神ニ富ミ部落青年會幹部トシテ克ク職責ヲ盡シ其會ノ振興ニ努メ聲望最モ厚ク傍ラ專心農業ニ從事シ家庭自ラ圓滿ナリ寔ニ模範トスルニ足ル仍テ木杯壹組ヲ贈リ之ヲ表彰ス

別所村　長尾辰吉

資性溫良恭謙ニシテ養父母ニ孝養ヲ盡シ熱心家業ニ從事シ傍ラ青年幹部トシテ克ク盡瘁シ其功勞尠カラス家庭亦頗ル圓滿ニシテ寔ニ青年ノ模範トスルニ足ル仍テ木杯壹組ヲ贈リ之ヲ表彰ス

的形村　佐山外吉

資性溫厚ニシテ篤實夙ニ兵役義務ノ重要ナルヲ感知シ進ンテ現役兵志願ヲナシ滿期歸鄕後ハ卒先公共事業ニ從事シ現ニ青年會幹部トシテ克ク會員ノ指導誘掖ニ努メ信望厚ク且熱心家業ニ從事シ老母ニ仕フル至孝ニシテ家庭圓滿ナル等稀ニ見ルノ青年ナリ仍テ木杯壹組ヲ贈リ之ヲ表彰ス

大鹽村　門利夫

資性溫順ニシテ曩ニ大鹽村郵便局集配人ニ傭ハレ勤續十ケ年一日ノ如ク精勵シ克ク新任者ヲ導キ殊ニ協同一致ノ氣風ニ富ミ通信事務ノ進捗ヲ計ル等稀ニ見ルノ行爲タリ今ヤ同局豫備集配人トシテ傍ラ家業ニ精勵シ至情ヲ傾ケテ母ニ事フ寔ニ奇特ナリ仍テ木杯壹組ヲ贈リ之ヲ表彰ス

大鹽村　關口松次

資性溫順內ニ在リテハ精勵農事ニ努メ亦克ク孝養ヲ盡シ出テハ社會公共ノ爲ニ盡瘁シ青年會幹部トシテ後進ヲ指導シ夙ニ其振興ヲ圖ル誠ニ奇特ナリ仍テ之ヲ表彰ス

別所村　小村伊作

一一、視察員派遣

本會は毎年會員中より然るべき人を選び、實業視察員並びに學事視察員として遠く他府縣にまで派遣し、各地の實業狀況及び產業組合、又は學校經營の狀態を視察せしめ、以て本郡產業の發達、學校教育の振興を圖りつゝあり。其回數及視察員氏名は之を省略す。

一二、副業奬勵

一般農家に副業を普及せしめんとし、年々多數の鯉兒を購入配布し、又養雞を宣傳すると共に品種を改良せんとし、屢々優秀なる種卵を購入し、各村に配布せり。

一三、女教員會援助

明治四十三年一月印南郡女教員會の創立なる。本會深く之に賛意を表し、同會事業助成の意味にて、毎年補助金を交付し、尙同會の事業につきあらゆる援助をなしつゝ

あり。

一四、青年訓練所大會

國運の進展を擔へる青年訓練所の圓滿なる發達を冀ひ、毎年十一月三日の全國體育日を期し青年訓練所大會を開催することゝし、大正十五年十一月三日第一回訓練所大會を伊保尋常小學校にて開催せり。

(イ)、第一回訓練所大會

大正十五年十一月三日伊保小學校庭にて第一回訓練所大會を開催す。訓練生六百三十六名出席、來賓として縣知事代理佐藤學務部長、第十師團長代理佐野歩兵少佐、聯隊區司令官伊藤大佐、三十九聯隊長代理堤歩兵大尉、各町村長、學校長、在鄉軍人分會長、青年會長、新聞記者等約壹百名參列、頗る盛會なりき。蓋し縣下に未だその擧を見ざる催なりしなり。

大會順序

一、午前十時整列　二、會長開會の辭　三、國歌合唱　四、令旨奉讀　五、知事閣下告辭　六、師團長閣下告辭　七、來賓祝辭　八、閲兵、分列　九、合同體操　一〇、萬歲三唱

休憩晝食

二、講演　青年訓練に就いて　佐藤學務部長

所感　佐野歩兵少佐

同　伊藤歩兵大佐

三、閉會の辭

尙本大會につき多木粂次郎氏より金壹百圓を寄贈せられたり。

(ロ)、第二回青年訓練所大會

昭和貳年十一月三日伊保小學校庭にて、第二回本郡青年訓練所大會を開催す。訓練生六百九十七名出席、來賓として縣知事代理川崎學務部長、第十師團長長谷川中將第十師團司令部附佐野歩兵少佐、姫路聯隊區司令官代理安藤歩兵少佐、多木代議士

各町村長、小學校長、本會顧問、名譽會員、各町村在鄕軍人分會長、青年會長、新聞記者等百二十餘名參列盛會なりき、當日總指揮は加古在鄕軍人會長を煩はしたり。

大會順序

一、午前十時整列　二、井内會長開會の辭
三、遙拜　四、國歌合唱
五、令旨奉讀　六、閱兵、分列
七、合同體操　八、訓練生表彰（曾根町名島正夫外三十名）
休憩晝食
九、教練
イ、訓練生教練
上莊村訓練生は武裝を整へ、各個、分隊、小隊教練及び輕機關銃を加へたる步兵一箇小隊を編成し、假設敵に對し猛烈なる攻擊戰を實施す。
ロ、現役兵の教練
左記現役兵の教練を見學す。

337167

步兵第三十九聯隊より派遣されたる須藤中尉以下六十四名及び機關銃分隊は、校庭に置きたる假設敵に對し、猛烈なる攻擊戰を實施し、終りて重機關銃の戰鬪教練を行ふ。（校庭に於ける戰鬪教練には鐵甲、毒瓦斯覆面を冠りて實施す）

尙此大會に表彰したる青年訓練生に對し、多木粂次郎氏より副賞品を贈與せられたり。

(八)、第三回青年訓練所大會

昭和三年十一月六日、本郡青年訓練所生徒に教練を實地に體驗せしめ、青訓の振興を促進し、兼ねて軍事思想を鼓吹し、國防觀念を養成する目的をもつて、青年訓練所聯合演習を左の順序にて擧行せり。

一、遭遇戰
二、閱兵式
三、統監岡本大佐の講評
四、知事代理川崎縣學務部長の告示
五、第十師團司令部附稻垣少將の訓示

六、松本自治會長の祝辭

七、井内三治協會長の挨拶

演習指導の要領は遭遇戰にして、本郡十五ヶ町村の青年訓練生徒約九百名を主體とし、之に加古川中學校四年生徒約百二十名、各町村在郷軍人若干名及び歩兵第三十九聯隊より特に派遣されたる輕機關銃八、之に要する人員十七名を加へ、左の如く東西兩軍に編成す。

青年訓練聯合演習兩軍編成表

區分	大隊	中隊	小隊番號	小隊長	訓練所	人員	輕機關銃配屬
東	歩兵大隊長 藤金歩兵中尉	第一中隊長 大西歩兵少尉	一	竹本歩兵伍長	平莊	六七	一
			二	永井歩兵上等兵	東神吉	四一	一
			三	原歩兵上等兵	東志方	五二	
	副官 瀧砲兵曹長	第二中隊長 植田歩兵少尉	一	神吉歩兵上等兵	西神吉	四五	一
	傳令指導員 三 平莊岸本歩兵上等兵 西神吉高井歩兵上等兵 東志方藤原歩兵上等兵		二	藤本歩兵特務曹長	志方	六七	
			三	長谷川歩兵上等兵	四志方	三五	
			一	高橋歩兵上等兵	上莊	三五	

區分	大隊	中隊	小隊番號	小隊長	訓練所	人員	輕機關銃配屬
西軍	歩兵大隊長 三木砲兵中尉	第一中隊長 魚橋歩兵少尉	一	藤原歩兵上等兵	阿彌陀	七〇	一
			二	地上歩兵伍長	別所	五五	
			三	西谷歩兵上等兵	米田	四一	
	副官 古門歩兵上等兵	第二中隊長 中村砲兵少尉	一	佐野歩兵上等兵	曾根	四〇	一
	傳令指導員 三 米田大西歩兵上等兵 別所大橋歩兵上等兵 曾根三枝歩兵上等兵		二	立岩歩兵上等兵	大鹽	五〇	
			三	妻鹿歩兵伍長	的形	六二	
			四	黒田歩兵上等兵	北濱	二六	
		第三中隊長 曾根歩兵曹長	一	井上歩兵上等兵	伊保	四〇	一
			二	濱田歩兵上等兵	同	四〇	
		第四中隊長 海老名輜重特務曹長	一		加古川中學	四〇	一
			二		同	四〇	
			三		同	四〇	
		砲兵中隊 後藤歩兵上等兵	黄旗一を以て假設す		別所在郷軍人	一	
生徒計九 阿彌陀一、別所一、米田一、曾根一、大鹽一、的形一、北濱一、伊保一、加古川中學一、							

區分	大隊	中隊	小隊番號	小隊長	訓練所	人員	輕機關銃配屬
西軍	歩兵大隊長 三木砲兵中尉	第三中隊長 杉田騎兵伍長	二	三柳歩兵上等兵	同	三五	
			三	加古歩兵上等兵	日毛印南工場	五〇	一
		砲兵中隊 大谷歩兵上等兵	黄旗一を以て假設す。		西志方在郷軍人	一	
生徒計八 平莊一、東志方一、東神吉一、西神吉一、志方一、西志方一、上莊一、日毛工場一							

演習指導部は、之を統監部・審判部・經理部の三部に分ち、各部を左の如く編成す。

一、統　監　部

統　監　姫路聯隊區司令官　岡　本　大　佐

統監部員　聯隊區司令部　鈴　木　少　佐　加古在鄉軍人會長、藤金同副會長、松本自治會長、井内三治協會長、松田青訓主事、分會長三、喇叭手一（伊保村）

二、審　判　部

審判官長　鈴　木　少　佐（兼務）

各町村長、青訓主事、在鄉將校一〇

編成に加はらざる指導員を審判官としたり。

三、經　理　部

經理部々員、郡内自治會主事、同事務員

尙他に不時救護の爲、醫師一名、看護卒（婦）二名より成る救護班を編成し、東神吉村役場に開設したり。

兩軍の集合地

區分	部隊號	集合地	時刻	摘要
東軍	大隊本部 第一中隊	西山	午前九時三十分	第一中隊は午前八時三十分平莊訓練所に第二中隊は午前八時志方訓練所に第三中隊は午前八時三十分上莊訓練所に集合し、中隊編成をなし、後上記の集合地に到る。
東軍	第二中隊			
東軍	第三中隊	養老		第一、第二中隊は午前八時四十分阿彌陀訓練所に第三中隊は午前九時三十分伊保訓練所に集合中隊の編成を終へ、上記の集合地に到り、第四中隊は中隊の編成をなし、豫定の陣地に向へり。
西軍	大隊本部 第一中隊	魚橋西端		
西軍	第二中隊			
西軍	第四中隊			
西軍	第三中隊	伊保小學校		

歩兵第三十九聯隊よりの參加部隊は、午前七時三十六分姫路發列車にて寶殿驛に到着す。

かくて戰機愈〻熟し、午前十時各所に於ける小競合に戰の幕は切り落され、戰鬪刻々激烈の度を增し、戰局益〻發展西神吉村宮の下に於て、兩軍主力部隊の正面衝突となり、戰最高潮に達したり。次で兩軍突擊白兵戰を演じ、統監部の休戰ラッパに壯烈なる戰の幕を閉ぢたり。時まさに正午。戰後兩軍日毛印南グラウンドに集合晝食を喫

し、午後一時より閲兵分列式、講評訓示等あり、三時すぐる頃閉會解散したり。

尚此度の演習に、多木粲次郎氏より賞品多數贈られたり。

一五、女子青年團援助

昭和二年七月二十四日郡公會堂に於て、印南郡女子青年團發會式擧行さる。本會は大いにその趣意に贊し、其健全なる發達を希望し、毎年幹部講習會を開催し、或は講師を聘して講演會を催し、その經費の全部を負擔することゝせり。

一六、會報發刊

本會は毎年一回乃至數回會報を發刊し、事業報告並に講演記錄を掲げ、以て當日聽講し得ざりし人々の便宜を圖る。

尚會報以外臨時に發刊せしものに、左記の數種あり。

一、平野庸脩翁傳　二、山片蟠桃翁事蹟

三、同　追　錄　四、簡易印南郡誌

（高等小學校兒童、並に青年補習の教科書として、簡易なる鄉土誌を編纂す）

一七、事業附記

(イ)、體育奬勵

毎年擧行する本郡聯合青年體育大會及び各種團體の體育的催ある時、其都度本會は夫々副賞品を贈りて之を奬勵し、以て學校兒童及び青年の體質の向上を圖る。

(ロ)、學藝競技大會

大正六年十二月二十六日より三日間、伊保尋常高等小學校に於て學藝競技會を開催し、終つて賞狀授與式を擧行せり。

二十六日　書方、裁縫

二十七日　圖畫、裁縫

二十八日　珠算、競技

競技後の成績品は直ちに一般の縱覽に供したるに、多數の參觀者あり、頗る盛會なりき。

(八)、聯合學藝會

大正十年三月十七、八兩日及び同十一年三月三、四の兩日に亙り、郡內小學校兒童聯合學藝大會を開催、多數の參觀者ありて頗る盛大なりしも、爾後の學藝會は各町村小學校に於て、各自擧行することゝなれり。

(二)、大正十二年十一月十日に下されたる國民精神作興に關する詔書の御趣意を奉戴し勤儉貯蓄奬勵宣傳の爲本會及び郡青年會、郡婦人會の聯合にて、勤儉貯蓄宣傳ビラ懸賞募集規定をつくり之を郡內より募集し、本縣社會課長に之が審査を委囑す。

應募總數六十五名。

而して一等當選ビラ壹萬枚を印刷し、之を郡內各戸に配布す。

入賞人員

一等	賞金	五圓	二名
二等	同	參圓	四名
三等	同	壹圓	六名
四等	同	五十錢	九名

光榮

一、大正八年度陸軍特別大演習御統裁遊ばさるゝ爲、須磨離宮に御駐輦あらせらるゝ大元帥陛下に

本會發刊の圖書、平野庸脩翁傳、山片蟠桃翁事蹟の二部を獻上したるに、翌九年四月三十日、宮內省より傳獻物受領の通知ありたり。本會にとりて無上の光榮なり。

印南郡三治協會長　井內中正

一、平野庸脩翁傳　壹部

一、山片蟠桃翁事蹟　壹部

右今般兵庫縣下行幸ニ際シ獻上願出之趣ヲ以テ傳獻被致候ニ付

御前へ差上候此段申入候也

大正八年十一月十三日

兵庫縣知事　有吉忠一

宮內大臣　波多野敬直殿

二、大正十三年二月十日、本縣知事より左記の通り選奬さる。

選奬狀　　印南郡三治協會

多年教育産業衞生ノコトニ盡瘁シ、其功績顯著ナリ依テ茲ニ金百圓ヲ下附シ之ヲ選奬ス

大正十三年二月十日

兵庫縣知事（從四位勳三等）平塚廣義 印

役員

一、本會現役員

（昭和四年五月現在）

會長　井內中正

副會長　松田久之助

教育部々長　植杉淨英

男子青年部々長　畑市之亮

女子青年部々長　石野あさ

婦人部々長　松本むね子

教育部幹事　鳥居直光

同　中野榮治

同　寺坂安治

男子青年部幹事　松本榮太郎

同　東村元次

女子青年部幹事　藤原みねよ

同　缺員

婦人部幹事　小原くに子

同　波多野はるゑ

評議員

（昭和四年五月現在）

網田貞藏　加古儀平　松本増吉　神吉龜太郎
前川昌三　畑市之亮　原大藏　黒田勝次
渡邊信一　富木歡次郎　石倉德太郎　田中富藏
井上仙藏　山口貞治　田中仁一郎　植杉淨英
中安廣治　鳥居直光　藤原和市　魚橋武夫
弓削英二　堀覺治　中野榮治　東村元次
大西慶次　寺坂安治　松本榮太郎　小島秀夫
上野薫次　松田久之助

顧問

伊藤長次郎　大西甚一平　田中俊二　瀧竹藏
山崎太郎治　眞鍋長治

二、三治協會歷代役員

(イ)、會長

明治四十年七月廿五日就任　伊藤長次郎
大正六年五月六日就任　井内中正
明治四十四年五月七日就任　伊藤英一

(ロ)、副會長

大西甚一平　田中俊二　井内中正　正木角三郎
常見勇藏　桝谷宗七　三宅照夫　森棟二
永良嘉七郎　上瀧誠一　高谷正義　松田久之助

(ハ)、教育部々長

松岡佐　廣田和直　山崎太郎治　林春次

(ニ)、衞生部々長

井内中正　松本増吉　釜江省三

(ホ)、勸業部々長

中安磯次　長谷川直吉　中谷與吉郎　船津吉太郎

(ヘ)、教育部幹事

小暮桂三郎　津田次郎　神吉龜太郎　伊藤英一
小河市太郎　山崎太郎治　高島三之助　伊藤政太郎
日下部房次郎　山口正　千種道雄　船津吉太郎

山本榮太郎　林　春次　高谷一次　澁谷義道
久保諒太郎　宮永兼二　井上仙藏　高谷正義
前川昌三　米澤久次郎　中谷與吉郎　三宅照夫
長谷川勝次　北野直次　增瀨祿

(ト)、衞生部幹事

松本增吉　藤岡忠太郎　佐々木源藏　山內藤太郎
横山光永　由井雄　平井律藏　木村覺太郎
山本正　內海健次　小田賢次　原田孫太郎
尾崎寅次　櫻井照三　神吉丈之助　石倉德太郎

(チ)、勸業部幹事

原田孫太郎　長谷川直吉　上野義一　入江光藏
伊藤政太郎　松岡種次　山崎太郎治　井上仙藏
中谷與吉郎　田中仁一郎　松原晴太郎　村田木之藏
磯部熊三　畑昌愷　黑田祐安　大西甚左久

(リ)、相談役

堀江虎五郎　石原虎太郎　大西甚一平　瀧竹藏
伊藤英一　松本增吉　田中俊二　長谷川直吉
伊藤長次郎　田中仁一郎　船津吉太郎　正木角三郎
山崎太郎治　片岡壽雄　小林雄一郎

(ヌ)、評議員

龜田精一　入江光藏　松本增吉　神吉龜太郎
瀧右左治　香川久太郎　藤井市之助　尾崎寅次
原熊市　原藤作　前田辰太郎　富士原元太郎
田中卯之松　中村爲藏　川本菊之助　小河市太郎
山口正　澁谷義道　桂芳松　高島三之助
住谷重太郎　林春次　津田次郎　小暮桂三郎
柳和一郎　加藤熊次郎　久保諒太郎　大西成巳
千種道雄　廣瀨健吉　山本利吉　進藤彥太郎
藤井孫太郎　前川重吉　船津吉太郎　西谷惣太郎

金川篤藏　瀧　範治　畑　昌愷　石坂惣七
内海健次　船江覺三郎　水野恒太郎　西崎玄治
磯部熊三　原　鏗爾　松本利兵衞　庵原才吉
梶原貞治　由井　雄　上杉富治　横山光永
山本榮太郎　笹倉義虎　河野岩吉　長谷川榮太郎
清流義正　鷲尾孫三次　日下部房次郎　植田彌兵衞
山本　正　鷲尾千賀次　齋藤幸生　花房信太郎
木村覺太郎　釜江省三　松本利平　喜多喜八郎
瀧　眞二　山崎貞次　正木角三郎　北野直次
山畑貞藏　沼田一良　渡邊信一　櫻井昌治
黑田辛五　前田安太郎　田中仁一郎　三木要次
中川鐵之助　前川千賀二　金川俊治　畑　貫次郎
上野義一　平位律藏　濱本彌七　松本新太郎
松井武平　長谷川元藏　北原哲郎　中井梅吉
柏木清治　前川昌三　村田木之藏　伊丹武司

長谷川直吉　田中俊二　船江勇次　竹本伊平次
原田四郎吉　岡田卯市　小田千代藏　神吉丈之助
山戸安治　三浦萬吉　中谷與吉郎　井置作次
玉川春吉　岡本彌四郎　三谷　鈞　井上仙藏
原田四郎作　正木榮次郎　高谷一次　原　長龍
大西成巳　高谷正義　鎌田小一　矢部清一郎
宮永兼二　植杉淨英　石田龍哉　荻内武治
松尾圓治　寺坂安治　田中笹太郎　圓尾幸藏
志摩友吉　島田　亨　中野榮治　東村元次
田中貞太郎　松本榮太郎　伊藤萬治郎　伊藤政太郎
垣内宗六　黑田祐安　太田藤吉　大西甚左久
高谷耕司　神吉丈之助　米澤久次郎　原　大藏
小田賢治　井澤恒三郎　櫻井久吉　田中富藏
弓削英二　加古儀平　櫻井照三　内匠吉治
小野碩彦　畑　市之亮　黑田勝治　上野薫治

中安廣次　廣瀨敎藏　增瀨祿　石倉德太郎
山口貞治　三宅照夫　藤原和市　大西慶次
寺坂安治　小島秀雄

會員

本會々員　一二五一名
內譯
名譽會員　一三名
特別會員　五六名
通常會員　一一八二名

歷代郡長

前官	本郡長任命月日	轉任又ハ退官別	同上年月日	氏名
	明治十二年一月十日	加古郡長	明治十五年四月十九日	赤堀威
揖保郡長	同十五年四月十九日	願非職免	同十七年四月四日	福原謙七
加古郡長兼務	同十九年九月六日	免兼官	同十九年五月三十日	赤堀威
	同廿二年七月二日	願免	同廿二年七月二日	小倉廣太郎
城崎美含郡長	同廿四年八月十四日	氷上郡長	同廿四年八月十四日	藤井雅太
兵庫縣屬	同廿五年七月十四日	川邊郡長	同廿五年七月三日	富田耕司
加古郡長	同廿九年十一月十三日	願免	同廿九年十月十三日	笠井彰
加古郡長	同卅一年十月三十一日	願免	同卅一年十月三十一日	八木虔介
兵庫縣屬	同四十年八月十日	願免	同四十年八月十日	堀江虎五郎
兵庫縣屬	大正二年五月三十日	赤穗郡長	大正二年五月三十日	福井義夫
兵庫縣屬	同八年一月十七日	加東郡長	同八年一月十七日	澤慶治郎
兵庫縣屬	同十年二月十二日	埼玉縣理事官	同十年二月十二日	林信夫
內務屬	同十一年六月二十三日	神崎郡長	同十一年六月九日	小泉賢次郎
兵庫縣屬	同十三年三月三十一日	兵庫縣事務官	同十三年三月三十一日	鳥羽巽

歷代町村長

町村名	氏名
曾根町	入江龜太郎　庵原才吉　田中虎次郎　龜田五一郎
	門脇善吉　岩尾瑞明　原　鏗爾　龜田精一
	伊藤政太郎　松本利平　臼井豐藏　河野岩吉
	網田貞藏
伊保村	高岡　說　伊藤長次郎　船津吉太郎　中谷久次郎
	野田（現伊藤）英一　喜多喜八郎　入江光藏　中谷與吉郎
	增瀨祿　加古儀平
米田町	山本市次郎　松本善吉　西谷惣太郎　山本菊太郎
	松本增吉
東神吉村	田淵恒太郎　喜多喜八郎　神吉龜太郎
平荘村	瀧　右左治　瀧　眞二　前川昌三
上荘村	香川久太郎　玉川春吉　畑　市之亮

町村名	氏名
東志方村	玉田範威　藤井市之助　沼田一良　村田木之藏
	原大藏
西志方村	渡邊傳次郎　內海健次　田中俊二　廣瀨敬藏
	原熊市　黑田勝治
志方村	廣瀨敬藏　小原八太郎　笹倉義虎　福原久太郎
	櫻井昌治　尾崎寅次　渡邊信一
西神吉村	前田辰太郎　山畑貞藏　松尾圓次　田中笹太郎
	竹本伊平次　富木歡次郎
阿彌陀村	黑田彥次　松本利平　松本新太郎　富士原元太郎
	黑田辛五　原田四郎作　岡本彌四郎　石倉德太郎
別所村	森本幾三郎　蔭山四郎平　井置彥次　萬永儀三郎
	澤田藤太郎　田中卯之松　前田安太郎　井置作次
	田中富藏

歷代小學校長

町村名	氏名			
曾根町	長谷川富次郎	藤戸德三郎	砂川八郎	田中梅樹
	小暮桂三郎	日下部房次郎	三谷鈞	圓尾幸藏
	高谷正義	植杉淨英		
	稻葉虎之助	大川金彌	高島三之助	日下部房次郎
的形村	中村熊三	井上木藏	井上惣兵衞	構辰治
	中野太藏	井上仙藏	大西定次郎	河野幾次
	中村爲藏	植田彌兵衞	磯部熊三	
北濱村	田中定十郎	田中源十郎	川本久三郎	川本直三郎
	川本菊之助	黑川孫右衞門	山口貞治	
大鹽町	內海敬十郎	山本治之作	梶原貞治	千葉保胤
	山本正	田中仁一郎		

伊保村	正木角三郎	林春次	久保諒太郎	高谷一次
	北野直次	植杉淨英	中安廣次	
米田町	廣瀨健吉	木村八郎	原谷吉藏	大西成巳
	加藤熊次郎	久保諒太郎	柳和一郎	高谷一次
	荻內武次	正木榮次郎	三宅照夫	鳥居直光
東神吉村	東勝三郎	鈴木房太郎	久保諒太郎	鷲尾彌三次
	山崎貞次	三木要次	北野直次	田中貞太郎
	內匠吉治	藤原和市		
平莊村	進藤彥太郎	澁谷義道	嶋田亨	藤原和市
	魚橋武夫			
上莊村 上莊校	藤井彌太郎	長谷川榮太郎	花房信太郎	植杉淨英
	原長龍	東村元次	弓削英次	
上莊村 國包校	前川重吉	北野直次	荻內武次	寺坂安治
	小野碩彥			

東志方村	藤井精一	中村由三郎	大原義夫
	久保諒太郎	中川鐵之助	柏木清治
	宮永兼二	西角慶介	矢野公彦
			山本利吉
			正木榮治郎
			堀覺治
西志方村	小暮桂三郎	木村八郎	長谷川辰次郎
	千種道雄	鷲尾彌三次	能瀬榮太郎
			鎌田小一
			中野榮治
志方村	長谷川辰次郎	廣瀬健吉	清流義正
	山崎貞次	原長龍	高谷正義
	松本榮太郎	植杉淨英	東村元次
			山口正
			鎌田小一
西神吉村	加藤熊次郎	松田春吉	大西成巳
			大西慶次
阿彌陀村	原谷吉藏	住谷重太郎	林春次
	寺坂安治		宮永兼二
別所村	鳥本與一郎	木村八郎	小暮桂三郎
	三村政太郎	齋藤幸生	久保諒太郎
	植杉淨英	松本榮太郎	
			北爪兼吾
			前川千賀治

的形村	井上平太郎	中安薫	高井熊治
	長谷川富次郎	八木廣吉	北爪兼吾
	桂芳松	矢部清一郎	大西慶次
			藤戸德三郎
			高松清喜次
			小島秀夫
北濱村	石丸庫三郎	小林堅治	金川善之助
	岸原悅夫	林春次	清流義正
	柳和一郎	高谷正義	志摩友吉
	小野碩彦	上野薫治	田中貞太郎
			新谷森藏
			前川千賀治
大鹽町	山崎榮	藤井彌太郎	鳥本與一郎
	津田次郎	伊丹武司	平田正雄
	松田久之助	林春次	中安廣次
			中安廣次

三治協會經費豫算

歳入之部

科目	明治四一年度	同四二年度	同四三年度	同四四年度	同四五年度	大正二年度	同三年度	同四年度	同五年度	同六年度	同七年度	同八年度	同九年度	同一〇年度	同一一年度	同一二年度	同一三年度	同一四年度	同一五年度	昭和二年度	同三年度	同四年度
財産收入	三五〇圓	四〇圓	四九〇圓	四九〇圓	四一〇圓	五一三圓	四七三圓	四七三圓	四六一圓	四四〇圓	四四〇圓	四四〇圓	四四〇圓	四四〇圓	四四〇圓	五六〇圓	五六〇圓	五八〇圓	五六〇圓	五六〇圓	五六〇圓	五〇〇圓

歳出之部

科目	明治四年度	同四二年度	同四三年度	同四四年度	同四五年度	大正二年度	同三年度	同四年度	同五年度	同六年度	同七年度	同八年度	同九年度	同一〇年度	同一一年度	同一二年度	同一三年度	同一四年度	同十五年度	昭和三年度	同三年度	同四年度
補助金	一一五〇	一〇〇〇	一一五〇	一一〇〇	一三七八	七〇〇	七〇〇	六五〇	八四〇	八五一	八三九	七三五	一一三六	九九〇	八〇〇	六五三	九五〇	九〇〇	二五〇	一三〇	七五〇	
繰越金	—	三〇〇	一三四	三五〇	二〇〇	八一四	三八〇	四〇〇	二五〇	三〇〇	二〇〇	五〇〇	一〇〇	二〇〇	二〇〇	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	二〇〇	一五〇	
寄附金	二〇	—	—	—	一五〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	五〇〇	八〇〇	
雑収入	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一〇	一〇	
合計	一五二〇	一七〇〇	一七二四	一九〇〇	二一四八	二〇六六	一五五二	一五二三	一五五一	一五九一	一四七九	一六六五	一八九一	一七六六	一六八一	一五六一	一五一四	一六一〇	一六一〇	一九二〇	二五八〇	二三一〇
事務費	八二	一〇八	一五六	一四一	一二九	一二四	一二九	一二九	一四七	一七九	一四五	一八〇	二五六	二五六	二六六	二六〇	三一	二六一	二七六	一〇〇	一〇〇	一〇〇
雑給	五七	七九	一〇七	一〇七	九五	一〇三	九五	九五	一〇八	一四〇	一一〇	一一〇	一七六	一七六	一九六	一九〇	二四一	一九一	二七六	一〇〇	一〇〇	—
需要費	二五	二九	二九	三四	三四	二三	三四	三四	三九	三九	三五	六〇	八〇	八〇	七〇	七〇	七〇	七〇	—	一五七	一七〇	一五〇
事業費	九五〇	一五一	一五〇二	一五七五	一七〇	一〇八三	一二七三	一二五三	一二六四	一二七四	一二四四	一四九〇	一五五〇	一二八九	一三五五	一八九〇	一四〇〇	一一七五	一四六五	二一二五	一七二五	一五〇
懇会及ビ講演会費	一七三	三五二	一八〇	二五九	二五六	一〇八	一三〇	一三〇	一三〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一一五	一一五	一三五	二九五	二七〇	二七五	三〇〇	三五〇	三五〇	一五〇
巡回講演費	八五	一二五	一〇〇	九〇	九〇	四五	一〇〇	八〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	二〇〇	二〇〇	一六五	一六〇	一六〇	一六五	一五〇	一〇〇	一〇〇	—
巡回文庫費	一三〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	一一〇	一四九	一二〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一二〇	一二〇	一二〇	一二〇	一二〇	一二〇	一二〇
講習会費	一五五	一八〇	一八〇	一七〇	四〇	二五五	二〇〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇
女子青年講習会費	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
品作立毛品評会費	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
産婆養成費	九五	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一四九	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇
婦人修養会費	一〇二	二〇四	四四二	四五八	三六〇	二七七	二八〇	一九〇	二三四	二三四	一七四	一五五	一五五	九五	六一							
表彰費	一〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一四〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一五〇	二〇〇	二〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
防疫費	五〇	五〇	四〇	二〇	五〇	—	五〇	四〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
調査費	—	一〇〇	—	—	—	—	—	—	—	五〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
展覧会費	—	—	—	—	五六〇	—	一四〇	二〇〇	—	—	一〇〇	四五〇	—	—	—	—	一〇〇	—	—	—	—	—
視察員派遣費	—	—	—	—	—	三〇	—	五〇	五〇	三〇	二〇	四〇	五〇	五〇	五〇	五〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
農事研究会補助	—	—	—	—	—	七五	八三	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
会報費	—	—	—	—	—	一九	四〇	五〇	三〇	二〇	一〇	五〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
水産養魚費	—	—	—	—	—	—	八三	八三	五〇	四〇	一〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
副業奨励費	—	—	—	—	—	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
体育奨励費	—	—	—	—	—	一四〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇
学芸会費	—	—	—	—	—	六四	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇
教育研究費	—	—	—	—	—	七〇	六六	六六	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五
青年訓練大会費	—	—	—	—	—	三四	二〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
記念事業費	—	—	—	—	—	七五	六六	六六	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五
貸付金	七五	七五	六六	六六	七〇	六四	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇
県教育会費負担	七五	七五	六六	六六	七〇	六四	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇
積立金	三五〇	—	—	一〇〇	一〇〇	一〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
基本金積立	三五〇	—	—	一〇〇	一〇〇	一〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
豫備費	六三	三三	三〇	二〇	二四八	一二五	五〇	一四〇	二〇〇	一〇〇	一〇〇	四五〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
合計	一五二〇	一七二七	一七三四	一九〇〇	二一四八	二〇六六	一五五二	一五四三	一五三三	一五五一	一五九一	一四七九	一六六五	一八九一	一七六六	一六八一	一五六一	一五一四	一六一〇	一九二〇	二五八〇	二三一〇

基本財産

八千五百七拾貳圓七拾七錢

（昭和四年三月末現在）

三治協會基本金醵出調

（明治四十一年）

町村名	百圓以上の寄附者 金額	人員	拾圓以上の寄附者 金額	人員	壹圓以上の寄附者 金額	人員	總計 金額	人員
曾根村	圓	人	圓	人	圓	人	圓	人
伊保村	一六〇〇	二	一五七	一〇	九九	四四	二五六	五四
米田町			二五	六	一八〇・五	一一五	一九四〇・五	一二三
東神吉村	二五〇	二	二五	二	一〇六	七七	一一一	七九
平荘村	二〇〇	一	五〇	五	一〇四	六八	三五四	七四
上荘村	七〇〇	三			一一五	六七	八一五	七〇
東志方村			一〇	一	一一九	九三	一一九	九四
志方村			一一〇	六	一〇六	四九	二一六	五五
西志方村			一〇〇	二	九七	七〇	一九七	七二
西神吉村			一三七	六	九五	七〇	二三二	七六
阿彌陀村	一〇〇	一	五〇	四	一四三	七八	二九三	八三
別府村			三〇	一	九七・六	六〇	一二七・六	六一
的形村	一〇〇	一	九〇	五	八一・五	四七	二七一・五	五三
北濱村			八〇	二	六一	四二	一四一	四四
大塩町	三〇〇	三	八〇	四	一〇四	三五	四八四	四二
警察署					二八	二七	二八	二七
合計	三二五〇	一三	一一〇四	五六	一六二二・六	一〇二四	五九七六・六	一〇九三

基本金壹百圓以上の寄附者

氏名	金額
伊藤長次郎	一五〇〇圓
大西甚一平	五〇〇
瀧竹藏	二〇〇
金川右左次	一五〇
田中繁太郎	一〇〇
入江光藏	一〇〇
長谷川新藏	一〇〇
梶原健次郎	一〇〇
梶原繁太郎	一〇〇
山本卓爾	一〇〇
原田四郎作	一〇〇
畑吉平	一〇〇

印南郡三治協會會則

（現在會則 昭和三年改正）

第一條　本會ハ印南郡三治協會ト稱シ事務所ヲ印南郡自治會内ニ置ク

第二條　本會ハ郡教育ノ普及發達ヲ企圖シ及ヒ青年會婦人會ノ指導奬勵ヲ爲スヲ以テ目的トス

第三條　前條ノ目的ヲ達スル爲教育、男子青年、女子青年、婦人ノ四部ニ分チテ事業ヲ行フ

第四條　本會ハ左ノ會員ヲ以テ組織ス

一、教育部

通常會員　一時ニ金壹圓以上ヲ醵出シタルモノ

特別會員　一時ニ金拾圓以上ヲ醵出シタルモノ

名譽會員　一時ニ金百圓以上ヲ醵出シタルモノ及ヒ會長ノ推薦ニ係ルモノ

二、男子青年部

各町村男子青年會

三、女子青年部

各町村女子青年團

四、婦人部

各町村婦人會

第五條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長　一名　副會長　一名

部長　四名

幹事　九名（教育部三名　女子青年部二名　男子青年部二名　婦人部二名）

評議員　三〇名

會長、副會長、部長、幹事ノ任期ハ三ケ年トス

但シ再選ヲ妨ケス

第六條　會長副會長ハ評議員會ニ於テ選擧シ部長幹事ハ各部ニ於テ推薦シ會長之ヲ囑託ス

評議員ハ各町村長、各小學校長ヲ以テ之ニ充ツ

第七條　本會ハ顧問ヲ置クコトヲ得
顧問ハ會長之ヲ推薦ス
第八條　會長ハ本會ヲ總理シ本會ヲ代表ス
副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルトキハ之ヲ代理ス
部長ハ會長ノ指揮ニ依リ其ノ部ヲ擔任處理ス
幹事ハ會長及ヒ部長ノ指揮ニ依リ其部ノ事務ヲ輔佐ス
評議員ハ本會ノ緊要事項ヲ評決ス
第九條　本會ノ集會ハ總會及ヒ評議員會ノ二種トス
總會ハ會長ニ於テ必要ヲ認メタル場合ニ之ヲ開ク
評議員會ハ毎年度ノ經費豫算並ニ決算ノ議定其他會長ニ於テ必要ト認メタル場合ニ之ヲ開ク
第十條　會則ノ變更、基本財産ノ處分ハ評議員會ノ決議ニ依ルモノトス
第十一條　本會ノ經費ハ財産收入補助金ヲ以テ之ニ充ツ
第十二條　本會ノ事業年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

私立印南郡三治協會會則

（明治四十一年創立當時）

第一章　名稱及ヒ組織

第一條　本會ハ私立印南郡三治協會ト稱シ郡内有志者ヲ以テ組織シ事務所ヲ印南郡役所内ニ置ク

第二章　目的及ヒ事業

第二條　本會ハ郡内ノ教育、衞生、勸業ノ發達普及ヲ企圖スルヲ以テ目的トス
第三條　前條ノ目的ヲ達スルタメ教育、衞生、勸業ノ三部ニ分チ事業ヲ行フ
但シ事業細則ハ別ニ之ヲ定ム

第三章　會員及ヒ役員

第四條　會員ヲ分チテ通常、特別、名譽會員ノ三種トス
通常會員ハ一時ニ金壹圓以上若クハ五ケ年間毎年金貳拾五錢ヅヽヲ醵出スルモノ
特別會員ハ一時ニ金拾圓以上ヲ醵出スルモノ
名譽會員ハ一時ニ金百圓以上ヲ醵出スルモノ及ヒ會長ノ推薦ニ係ルモノ

第五條　會員死亡ノ場合ハ屆出ニヨリ相續人之ヲ繼承スルコトヲ得

但シ推薦ニ係ルモノハ此限リニアラス

第六條　本會ハ左ノ役員ヲ置ク、但シ任期ハ三箇年トス

會　長　一名　副會長　二名

部　長　三名（教育・衛生・勤業ノ三部）　幹　事　十五名（各部五名ヅヽ）

專任幹事　一名　會計係　二名

相談役　若干名

第七條　本會ニハ評議員五十名ヲ置ク

第八條　役員及ヒ評議員ノ選擧法左ノ如シ

會長、副會長ハ總會ニ於テ公選シ部長、幹事、會計係、相談役、評議員ハ會長ノ指名ニヨル

第四章　役員ノ權限

第九條　會長ハ本會ヲ總理ス

副會長ハ會長ヲ輔佐ス

部長ハ各部ヲ擔任處理ス

幹事及ヒ專任幹事ハ會長及ヒ部長ノ指揮ニ依リ各部ノ事務ヲ處理ス

會計係ハ本會ノ會計ヲ擔任ス

相談役ハ本會樞要ノ協議ニ參與ス

評議員ハ本會緊要ノ事項ヲ評決ス

第五章　集會

第十條　集會ヲ分チテ三種トス

一、總集會　二、役員會　三、評議員會

總集會ハ役員選擧、會則變更、基本財産ノ處分、其他會長ニ於テ必要ト認メタル場合ニ之ニ之ヲ開ク

役員會ハ評議員會ヘ提出スヘキ議案ノ協定、其他會長ニ於テ必要ト認メタル場合ニ之ヲ開ク

評議員會ハ毎年度豫算、決算及ヒ事業方法ノ議定其他會長ニ於テ必要ト認メタル場合ニ之ヲ開ク

第六章　會計

第十一條　本會々計ハ四月一日ニ始リ翌年三月末日ニ終ル

第十二條　本會ハ會員ノ醵出金ヲ以テ基本財産トス

但シ保管法ハ別ニ之ヲ定ム

第十三條　本會ノ經費ハ基本金ノ利子、郡費補助金及ヒ寄附金ヲ以テ之ニ充ツ

印南郡三治協會巡回文庫規定

（明治四十一年創設）

第一章　總則

第一條　本文庫ハ本會々員ニ讀書ノ便宜ト趣味トヲ與フルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハ印南郡三治協會巡回文庫ト稱シ事務所ヲ印南郡自治會内ニ置ク

第三條　本協會教育部ハ文庫臺帳ヲ製シ其巡回並ニ書籍ノ出入等一切其責ニ任スヘキモノトス

第二章　文庫及ヒ巡回方法

第四條　文庫ハ拾五個ノ書函ヲ以テ組織シ第一號ヨリ第十五號ニ至ル

第五條　文庫内ニ收容シアル圖書ノ目錄ハ其蓋ノ内面ニ掲載ス

第六條　文庫ノ巡回ハ左ノ順序ニヨリ各一ケ月ノ滯留トス

一、曾根町　二、伊保村　三、米田町
四、東神吉村　五、平荘村　六、上荘村
七、東志方村　八、志方村　九、西志方村
一〇、西神吉村　二、阿彌陀村　三、別所村
一三、的形村　一四、北濱村　一五、大鹽

第七條　小學校長ハ毎月五日迄ニ文庫ノ内容ヲ整理シ午後五時迄ニ次校ニ送付スルモノトス

第三章　管理

第八條　文庫ノ管理ハ小學校長ニ囑託ス

第九條　小學校長ハ文庫受授ノ責ニ任ス

第十條　小學校長ハ受ケタル文庫ノ内容若シ不足汚瀆又ハ破損等アルトキハ其旨直ニ本會教育部ヘ報告スヘシ

第十一條　小學校長ハ本部ノ通知ニヨリ新購入圖書ヲ庫內ニ容ル、トキハ其蓋ノ內面ノ目錄ニ其書名冊數及ヒ年月日ヲ記入スルモノトス

第四章　借　覽

第十二條　小學校長ハ新ニ文庫ヲ受ケタルトキハ左記借覽表ヲ作成シ區內會員ニ配布スルモノトス

書名	冊數	借覽期限	借覽者姓名

第十三條　小學校長ハ借覽者名簿ヲ製シ借覽書名、借覽書冊數、借覽期限、借覽者姓名等ヲ記錄シ置クモノトス

第十四條　借覽者ハ借覽期日迄ニ當該小學校長ニ返付スヘシ

第十五條　借覽者ニシテ其圖書ノ汚瀆破損又ハ紛失等ヲナシタルトキハ其辨償ノ責ニ任ス

印南郡三治協會教育品展覽會會則

（大正元年）

第一章　總　則

第一條　本會ハ郡內及ヒ兵庫縣下一圓並ニ全國ノ公私立學校幼稚園ノ成績品教育ニ關スル製作品及ヒ參考品ヲ蒐集陳列シテ公衆ニ觀覽セシメ教育ノ進步發達ニ資スルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハ事務所ヲ印南郡役所內ニ置ク

第三條　本會ニ左ノ役員ヲ置キ事務ヲ分掌ス

會長　一名　副會長　二名
幹事長　一名　相談役　五名
幹事　五名　委員　若干名

第四條　一、會長、副會長ハ三治協會長並ニ副會長其任ニ當リ會務ヲ總理ス
二、幹事長ハ教育部長ヲ以テ之ニ當テ幹事以下ハ會長之ヲ推選シ會長ノ命ヲ受ケテ各分擔事務ヲ掌理ス

第五條　本會長ハ審査委員若干名ヲ囑託シ出品物ノ審査ニ從事セシム

第二章　出　品

第六條　本會ニ出品スヘキ種類左ノ如シ

第一部　郡內出品物

第一區　學校教員ノ考案ニ係ルモノ

第二區　各小學校兒童成績品

第三區　各種學校生徒成績品

第四區　青年會處女會其他ノ出品物

第五區　郡內教員並ニ兒童ノ特別出品物

第二部　郡外出品物

第一區　縣下各郡小學校及ヒ師範學校附屬小學校兒童成績品

第二區　各府縣小學校及ヒ師範學校附屬小學校兒童成績品

第三區　縣下各中等學校其他補習學校生徒出品物

第四區　縣下各郡市初等教育並ニ社會教育ニ關スル出品物

第三部　參考品

第一區　郡內生產品

第二區　各種商店出品物

第三區　各種ノ參考品

第三章　審査

第七條　個人及ヒ商店ニ於ケル教育製作品及ヒ參考品ハ本會ノ承認ヲ經テ出品スルコトヲ得

第八條　出品物中第六條第一部ニ屬スル出品物ハ之ヲ審査シ成績優等ノ物ニハ褒狀ヲ授與ス

第九條　審査委員ハ審査結了後其成績ヲ會長ニ薦告スルモノトス

第四章　縱覽

第十一條　會場ハ毎日午前八時ニ開キ午後四時ニ閉ツ

但シ臨時必要ナル場合ニハ時間ヲ伸縮スルコトアル可シ

第十二條　縱覽人ハ係員ノ許認ヲ受クルニアラサレハ陳列品ニ手ヲ觸ル、コトヲ得ス

第十三條　本規則ニ明文ナキ事項ハ會長之ヲ處理ス

細則

第一部　郡內出品物

第一區　學校教員ノ考案ニ係ルモノノ種類左ノ如シ

1、訓練方案
2、各科教授方案
3、教材研究
4、教授細目
5、標本模型
6、教授具
7、圖案統計
8、其他教育上有益ナル考案

第二區　各小學校兒童ノ成績品

書方、圖畫、手工、裁縫トシ、書方、圖畫ハ全部出品シ手工、裁縫ハ一校優等品各學級ニテ五點以上トス

圖畫、書方ノ寸法ハ追テ之ヲ定ム

第三區　各種學校生徒成績品

郡內裁縫學校並ニ針子屋成績品出品

第四區　青年會、處女會其他ノ出品物

製作品、書畫、沿革、規則、事業ノ狀況及ヒ寫眞等

第二部　郡外出品物

第一區　縣下各郡市小學校及ヒ師範學校附屬小學校兒童成績品

書方、圖畫、手工トシ各學年優等品二點ツヽトス（寸法ハ追テ之ヲ定ム）

第二區　各府縣小學校及ヒ師範學校附屬小學校兒童成績品

第二部第一區ニ同シ

第三區　縣下中等學校其他補習學校生徒出品物

書方、圖畫トシ各學年二點ツヽ

第四區　縣下各郡市初等教育並ニ社會教育ニ關スル出品物

教師ノ考案ニ係ル訓練教授ノ方案、教材研究、教授細目、標本模型、教具、圖案統計、其他教育上有益ナル考案

青年會及ヒ處女會等ノ製作品、書畫、沿革、規則、事業狀況及ヒ寫眞等

第三部　參　考　品

第一區　郡內生產品

農、工、水產物等ニテ參考トナルヘキモノトシ產地、產額、販路等ノ統計ヲ添付スヘシ

第二區　各種商店出品物

器械、標本、文具、玩具、書籍其他兒童教育上參考トナルヘキモノ

第三區　各種ノ參考品

各學校所有ノ器械標本類

各人所有ノ書畫古器物等ニテ一般教育上參考トナルヘキモノ

昭和四年五月十五日印刷
昭和四年五月十八日發行

（非賣品）

著作兼發行者　兵庫縣印南郡　三治協會
右代表者　井內中正

印刷者　日本印刷製本株式會社
代表者　堀越幸

印刷所　日本印刷製本株式會社
大阪市西區阿波座二番町一

29.10.29

10